

# 京都府埋蔵文化財情報

第139号

松井横穴群出土の人骨資料	岡崎健治	1
共同研究 屋外排水溝をもつ竪穴建物—弥生時代後期の男山～枚方丘陵を中心に—	小池 寛・増田孝彦・川上晃生	15
研究ノート 西外古墳群の研究(中)	桐井理揮・肥田翔子・木村結香	23
研究ノート 外来系土器にみる初期古墳の成立基盤—城陽市芝ヶ原古墳築造の背景—	高野陽子	33
研究ノート 近世土師質小壺「つぼつぼ」の検討	加藤雄太	39
令和2年度発掘調査略報		45
1. 金生寺遺跡第5・7次		
2. 金生寺遺跡第8次		
3. 法貴峰20号墳第2次		
4. 犬飼遺跡第6次		
5. 犬飼遺跡第7次		
6. 犬飼遺跡第8次		
長岡京跡調査だより・135		53
普及啓発事業(令和2年8月～令和3年1月)		55
センターの動向		57

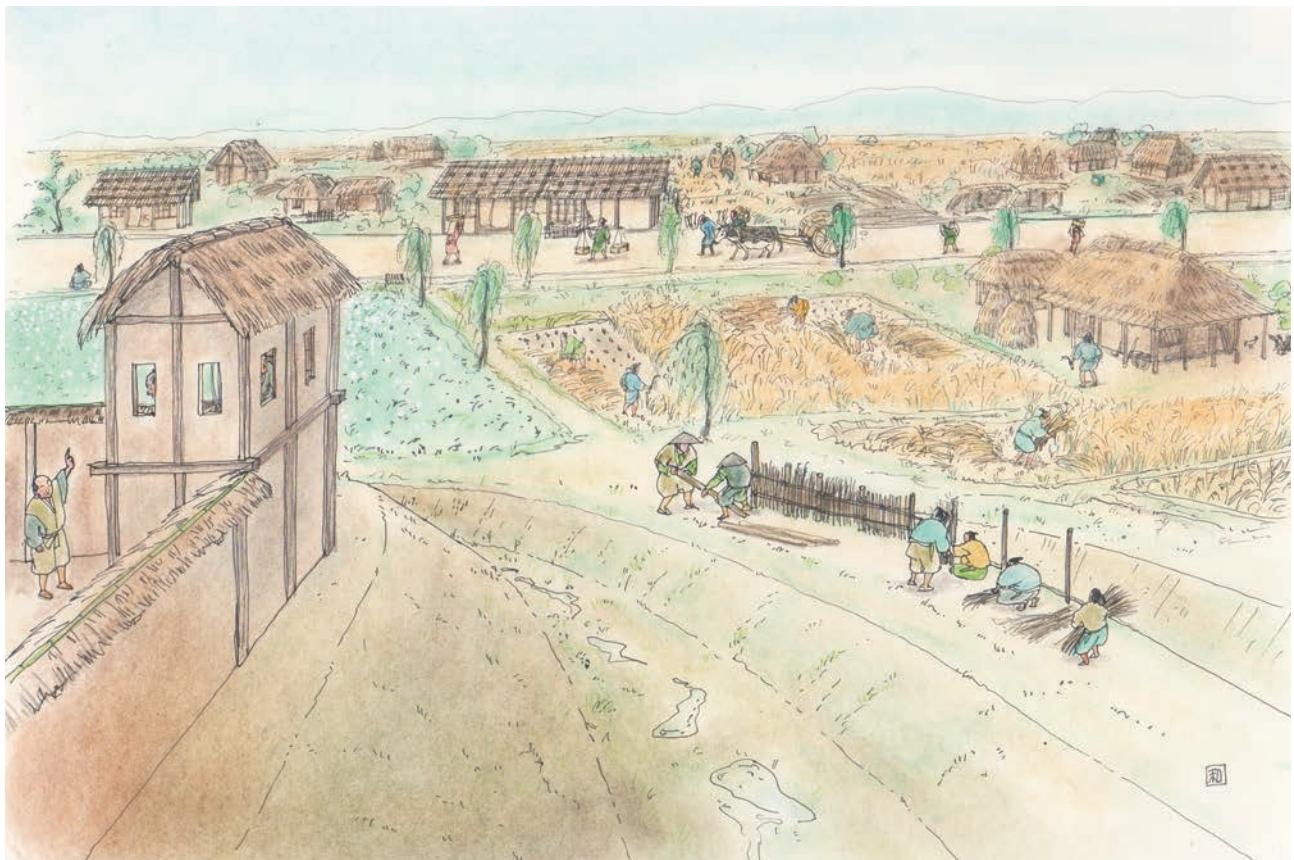
2021年3月

公益財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

普及啓発事業：特別展覧会「動乱の世から太平の世へ」で作成した復元イラスト



(1) 16世紀前半頃の都の様子(復元イラスト) 早川和子氏画



(2) 戦国時代の館を囲む堀と周辺の景色(復元イラスト) 早川和子氏画

# 松井横穴群出土の人骨資料

岡崎 健治

## 1. はじめに

古墳時代は、社会階層が複雑化した国家の形成期であり、こうした社会情勢が葬送行為にいかに表現されるのかについて、人骨資料を用いた研究が多く為されてきた(田中1995、清家2010など)。しかし古墳時代の畿内は、国家形成の舞台に近くそれだけに重要であるのにも関わらず、保存良好な人骨の出土例は限られてきた。

京都府南部に位置する八幡市から京田辺市にかけての丘陵上の直径約1.5kmの範囲には、松井横穴群、女谷・荒坂横穴群、狐谷横穴群、美濃山横穴群などが集中している。これらの横穴群には合計して数百基を超える数が存在すると想定されており、一体となった横穴群と考えられている(平良1975など)。この一部である松井横穴群(京田辺市)は、京都府埋蔵文化財調査研究センターが平成23~26年度(第1~4次)にかけて発掘調査を実施し、埋葬人骨が出土した。

今回、松井横穴群から出土した人骨を精査する機会に恵まれたので、以下に報告する。<sup>(注1)</sup>

## 2. 資料内容と分析方法

松井横穴群では、高い密度で70基の横穴が検出された。横穴の構築は6世紀後半に始まり、7世紀末~8世紀初頭まで続いたとされる。同時期の群集墳と副葬品に違いがないため、その埋葬者らの社会的性格も同様と考えられた。つまり、支配階層ではなく「同族関係を超えた政治的レベルで墓域を特定箇所に集中された一群の人たち」(和田1992)とされている(京都府埋蔵文化財調査研究センター2018)。横穴の一部は12世紀後半~13世紀前半に墓として再利用されており、人骨は70基の横穴中、18基の横穴から出土した。

分析方法は、性別と年齢については主にBuikstra and Ubelaker (1994) とWhite and Folkens (2005)によって総括された方法を用いて判定し、一部、東アジア人を対象に開発された方法を援用した。寛骨が利用可能な場合、性判定はPhenice (1969)、Bruzek (2002)、Walker (2005)、Takahashi (2006) の方法などを用いた。年齢推定については、恥骨結合面の変性はTodd (1921)、埴原 (1952)、耳状面の変性はLovejoyほか (1985)、Buckberry and Chamberlain (2002)、Igarashi ほか (2005) に依拠した。寛骨が遺存していない場合、性判定は、頭蓋の特徴に加え、保存不良骨の性判定のために中橋によって考案された境界値法(中橋1988)や歯冠計測値に基づく判別閾数(Matsumura1990、岡崎2005)などを援用した。年齢推定は、寛骨が欠損している際は頭蓋縫合の閉鎖(Meindle and Lovejoy1985、Koizumi1982)と歯冠咬耗度(Lovejoy1985)を参考にした。未成人骨の年齢は、歯牙の形成・萌出と骨癒合の状態および骨幹長から推定した(Okazaki2010、

Okazaki and Nakahashi(2011)。骨計測は、Martinの方法(馬場1991)に従った。口腔疾患については、主にLukacs(1989)とHilson(1996)による基準に依拠した(Okazakiほか2013a・b)。

### 3. 結果

表1に遺構(横穴)単位の最小個体数、性別、年齢などを示した。年齢は以下の通りの区分で表記した。乳児0～1歳、幼児1～6歳、小児6～12歳、若年12～20歳、壮年20～40歳、熟年40～60歳、老年60歳～、成人20歳～となる。個別資料の記述については、現地での取り上げ番号を用いる。歯式については文末に一覧を示した(第17図)。以下に人骨の所見を記述する。

#### 1) 29号横穴(SX1209)(第1図)

頭蓋骨、下顎骨の破片およびその歯牙、上腕骨、大腿骨の破片が検出された。大腿骨の遠位は墓道側を向いていた。重複する部位は確認されなかつたため、単体の埋葬者と考えられる。

①遺存状態 頭蓋は、左外耳孔周辺部、左後頭頸、左下顎枝(全てNo.17)、後頭骨(No.16)などの破片が確認された。歯牙は、遊離歯(No.14)のみが認められた。

四肢は、長管骨の断片が数多くみられ、同定可能であったのは右上腕骨と左大腿骨の骨幹部のみであった(それぞれNo.20)。

②性別 大腿骨の骨幹部は比較的大きかったが、保存不良のため計測は難しかった。歯冠計測値に基づく判別閾値を用いた結果、女性に判定されたもの(事前確率74.1%、事後確率65.3%で女性)、その確率は低かった。したがって、性別不明とした。

③年齢 歯冠咬耗度は、第1大臼歯象牙質の露出は点状から面状におよび、第2大臼歯象牙質はほとんど露出していないかった(LovejoyのF)。後頭骨のラムダ縫合もしくは後頭乳突縫合の一

表1 松井横穴群から出土した人骨一覧

横穴		最小個体数	個体ID	性別	年齢	備考
29号	SX1209	1		不明	壮年	
32号	SX0103	1		不明	幼児	
34号	SX0105	1		女性?	壮年	
43号	SX0114	1		男性	壮年～熟年	
45号	SX0116	1		不明	壮年	
46号	SX0117	1		不明	壮年～熟年	
47号	SX0118	1		不明	壮年	
50号	SX0121	1		男性	壮年～熟年前半	
59号	SX0209	1		不明	成人	
61号	SX0211	2	A号 B号	男性 不明	壮年 未成人	
62号	SX0212	3		男性 女性 不明	成人 壮年 幼児	齶歯・骨膜炎あり 約4歳
67号	SX0218	0		-	-	
68号	SX0219	1		不明	成人	
69号	SX0220	2	A号 B号	男性 不明	壮年 成人	
70号	SX0221	4	A号 B号 C号	男性 女性 不明	壮年 壮年 壮年前半 幼児	齶歯あり 1～2歳
72号	SX0223	1		男性	壮年前半	
77号	SX0404	3	A号 B号 C号	女性 不明 不明	壮年～熟年 成人 成人	

幼児1～6歳、壮年20～40歳、熟年40～60歳、成人20歳以上

部が確認され、完全に開放していた。したがって、壮年と推定された。

### 2) 32号横穴(SX0103)(第2図)

中世に再利用された面から歯牙と骨片が検出された。上顎の右中切歯と左第1小白歯が認められ(No.11)、両者ともに未咬耗であるため幼児個体と考えられる。前者の舌側面は、深さ1mm以上のシャベル状を呈していた。長管骨の破片(No.10)があるが、部位の同定は難しかった。その他、イヌの小白歯と大臼歯がそれぞれ1点(No.13)認められた。

### 3) 34号横穴(SX0105)(第3図)

歯牙と下肢骨の断片のみが検出された。重複する部位は確認されなかつたため、単体の埋葬者と考えられる。

#### ①遺存状態 歯牙は、遊離歯のみが認められた。

下肢骨の大部分は、骨幹部の断片であったが、左右大腿骨の骨幹部(No.21,20)、右脛骨の骨幹部(No.23)が確認された。

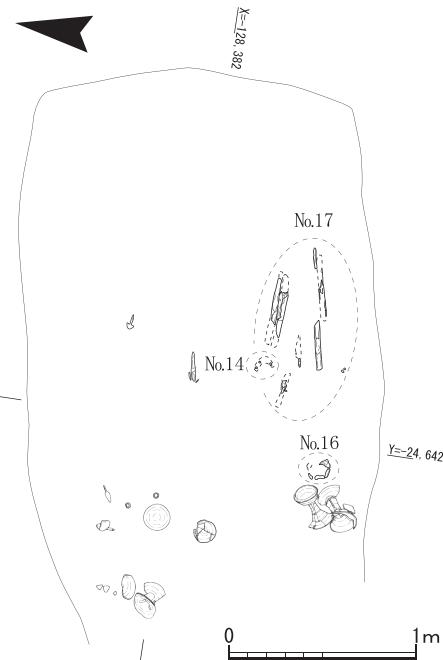
②性別 右脛骨最小周(68mm:境界値71.1mm)は男女の境界値に近いものの、若干小さかった。歯冠計測値に基づく判別関数を用いた結果、女性に判定された(事前確率84.9%、事後確率72.6%で女性)。したがって、女性の可能性が挙げられた。

③年齢 小白歯と第1大臼歯の咬耗は弱く、象牙質の露出は認められなかった(LovejoyのB1-C)。長管骨の緻密質は比較的厚く、少なくとも成人に達していたと考えられた。したがって、壮年と推定された。

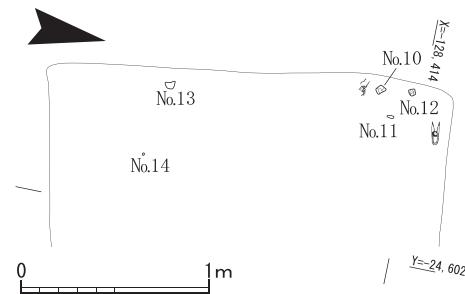
### 4) 43号横穴(SX0114)(第4図)

頭蓋、右上腕骨、脛骨が検出された。遺存部位は少なく重複する箇所は確認されないため、単体の埋葬者とする。

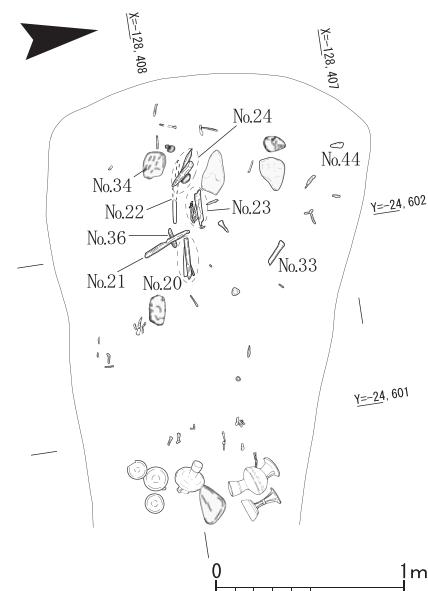
①遺存状態 頭蓋は、頭頂部を除く頭蓋冠の多くが遺存していた(No.12)。その他、右頬骨弓、錐体などが認められた。また、遊離歯として犬歯が確認されたが、上下は不明である(No.16)。上肢は右上腕骨の骨幹部(No.13)、下肢は左右不明の脛骨の破片(No.14)が認められた。



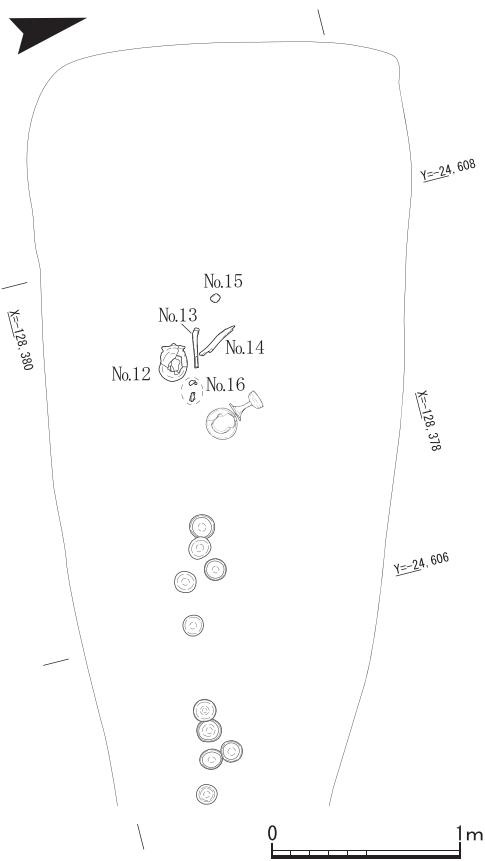
第1図 29号横穴人骨出土状況



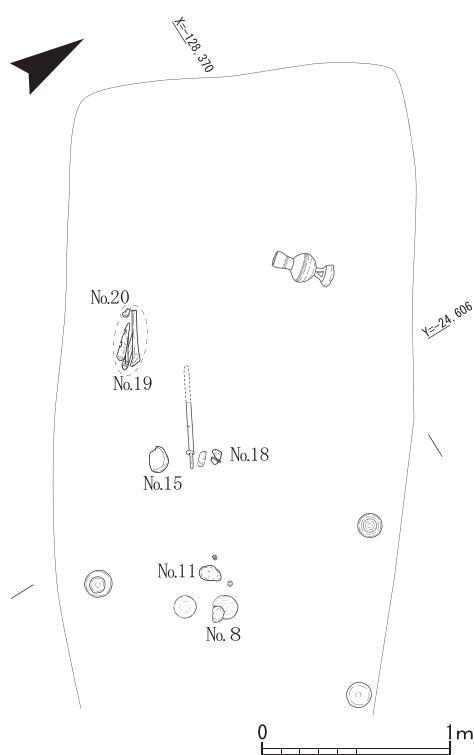
第2図 32号横穴人骨出土状況



第3図 34号横穴人骨出土状況



第4図 43号横穴人骨出土状況



第5図 45号横穴人骨出土状況

②性別 眉弓が強く発達しており、上腕骨最小周(66mm:境界値59.3mm)は大きいため、男性と考えられた。

③年齢 犬歯の咬耗は象牙質が点状に露出するに留まるものの、頭蓋縫合と矢状縫合は一部消失しているため、壮年から熟年の範囲に収まると考えられた。

#### 5) 45号横穴(SX0116)(第5図)

頭蓋と下肢の骨が確認された。出土時、大腿骨と脛骨が横に並んだ状態で、遠位が両者ともに奥壁に向いており解剖学的位置を保っていなかった。重複する部位は確認されなかつたため、単体の埋葬者と考えられる。

①遺存状態 頭蓋は、正中矢状線沿いに前頭骨、頭頂骨、後頭骨の一部分、その他には左右側頭骨の錐体およびツチ骨が認められた(No.15)。歯牙は、歯式に示したもののに他に、円錐歯もしくは第3大臼歯と考えられるものが1点あった(No.11)。

下肢骨は、左寛骨の大坐骨切痕周辺部(No.20)、左大腿骨と左右脛骨と右腓骨の骨幹部(No.19)が認められた。

②性別 左大腿骨中央周(85mm:境界値85.3mm)は男女の境界値に近似した。歯冠計測値に基づく判別閾数を用いた結果、男性に判定されたものの(事前確率81.4%、事後確率50.6%で男性)、その確率は低かった。したがって、性別不明とした。

③年齢 歯冠咬耗度は、象牙質の露出はほとんどなく(LovejoyのC-E)、矢状縫合と冠状縫合は開放しているため、壮年と推定された。

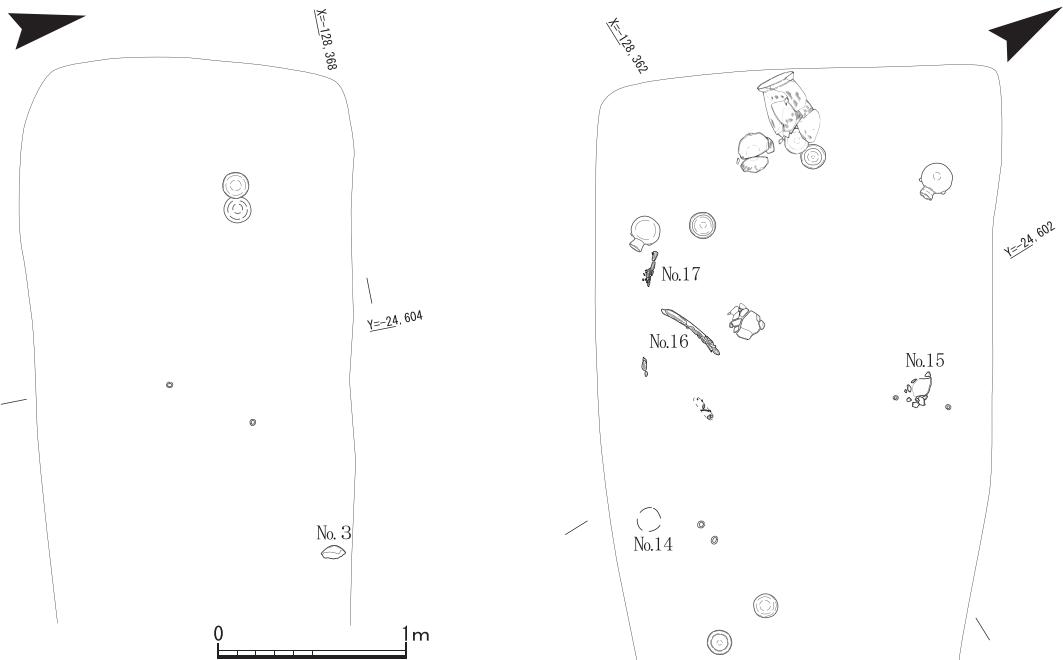
#### 6) 46号横穴(SX0117)(第6図)

頭蓋(No.3)のみが出土した。遺存部位は少なく重複するものは確認されないため、単体の埋葬者とする。

①遺存状態 頭蓋冠のラムダ周辺部、左側頭骨の錐体が確認された。

②性別 保存不良のため性別不明とした。

③年齢 ラムダ縫合は開放し、矢状縫合は一部消失



第6図 46号横穴人骨出土状況

していたため、壮年から熟年の範囲に収まると考えられた。



第7図 47号横穴人骨出土状況

### 7) 47号横穴(SX0118)(第7図)

頭蓋と大腿骨が確認された。頭蓋は、南側壁付近と北側壁付近の両地点から出土したもの、重複する部位はないため、単体の埋葬者とする。

①遺存状態 後頭骨の後頭鱗、側頭骨の錐体と右下顎窩(No.14)、頭蓋冠の破片と歯牙(No.15)、大腿骨骨幹部の破片(No.16,17)が認められた。

②性別 遺存部位が少ないため、性別判定は難しかつた。

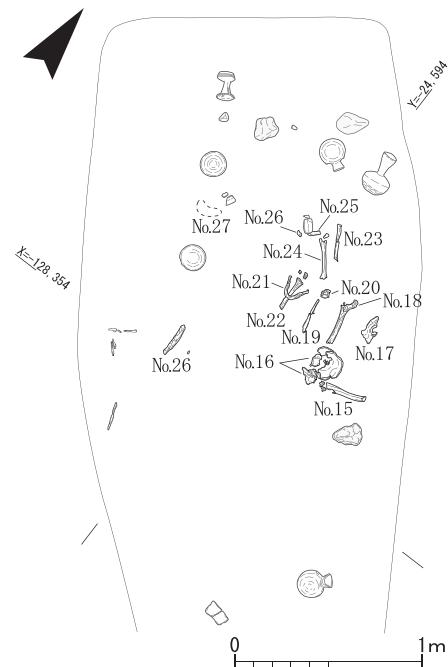
③年齢 歯冠咬耗度は、象牙質の露出は限定的であり(LovejoyのC-F)、ラムダ縫合は開放しているため、壮年と推定された。

### 8) 50号横穴(SX0121)(第8図)

出土状況は解剖学的位置を保っていなかったものの、重複する部位は確認されないため、単体の埋葬者と考えられる。

①遺存状態 頭蓋は、前頭骨の額部と眉間および右眼窓上縁、ラムダ周辺の左右頭頂骨と後頭骨、右側頭骨(No.16)、およびほぼ完形の下顎骨(No.21)が認められた。

軀幹骨は、肋骨片(No.25)、上位の腰椎(No.20)が認められた。四肢骨は、左右上腕骨の骨幹部(No.24,22)、左



第8図 50号横穴人骨出土状況

尺骨の骨幹部(No.19)、遠位端が欠損した左橈骨(No.23)、左坐骨(No.17)、遠位端が欠損した左大腿骨(No.18)、左脛骨の骨幹部(No.15)が認められた。

②性別 乳様突起長(19mm:境界値26.4mm)は小さいものの、より性差が明確な左上腕骨最小周(65mm:境界値59.3mm)、左大腿骨中央周(90mm:境界値85.3mm)は大きいため、男性の可能性が高かった。

③年齢 歯冠咬耗度は、象牙質の露出が一部のみに限られたが(LovejoyのE-G)、矢状縫合は概ね消失し、ラムダ縫合は一部消失していたため、壮年から熟年前半の範囲に収まると考えられた。

#### 9) 59号横穴(SX0209)(第9図)

頭蓋と大腿骨の破片のみが確認された。出土状況は、頭蓋が墓道側、右大腿骨は遠位が奥壁側を向いていたが、もう一方の大腿骨が両者の間に位置し、解剖学的位置は保っていなかった。遺存部位は少ないものの重複する箇所は確認されないため、単体の埋葬者とする。

①遺存状態 頭蓋冠の破片、側頭骨の錐体(No.11)、右大腿骨骨幹部の破片(No.10)、左右不明の大腿骨骨幹部の破片(No.9)が認められた。

②性別 保存不良のため不明とした。

③年齢 繊密質の厚みから成人であるものの、詳細な年齢は不明であった。

#### 10) 61号横穴(SX0211)(第10図)

頭蓋と下肢の骨が確認された。頭蓋骨は2地点から出土し、重複する部位はないものの、右(西)側壁付近から出土した頭蓋骨は非常に薄いため、別個体(未成人)と考えられる。人骨の解剖学的位置および形態的特徴から、下肢骨に対応する頭蓋は、墓道側から出土したものと妥当と考えられる。したがって、墓道側の頭蓋骨と四肢骨をA号人骨、右側壁付近の頭蓋骨をB号人骨とした。

##### A号人骨)

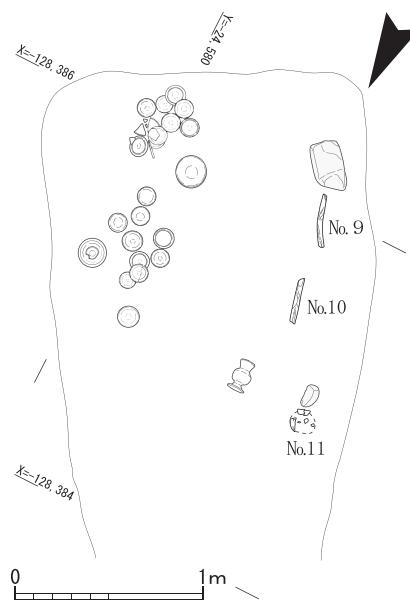
①遺存状態 墓道側の頭蓋骨(No.15)は、前頭骨の額部、アステリオン周辺の左頭頂骨、右下顎体の一部が認められた。



写真1 50号横穴人骨の下顎



写真2 50号横穴人骨の四肢骨



第9図 59号横穴人骨出土状況

下肢骨は、右大腿骨の骨幹部（No.5）と骨頭（No.10）、左大腿骨の近位端（No.4）、右脛骨の骨幹部（No.11）、左脛骨の下関節面（No.6）、左右距骨（No.9,12）、右踵骨（No.13）が認められた。その他に長管骨のものと考えられる破片（No.7,14）があるが、部位の同定は難しかった。

②性別 大腿骨頭垂直径（46mm）、大腿骨骨体中央周（96mm:境界値85.3mm）、および脛骨栄養孔位周（94mm:境界値86.8mm）はかなり大きく、筋付着部（粗線とヒラメ筋線）も発達していることから、男性の可能性が高かった。

③年齢 大臼歯の歯冠咬耗度は、象牙質の露出が一部のみに限られ（LovejoyのG-H）、ラムダ縫合は開放し、大腿骨頭窩の加齢変化も限定的であったため、壮年と推定された。

#### B号人骨

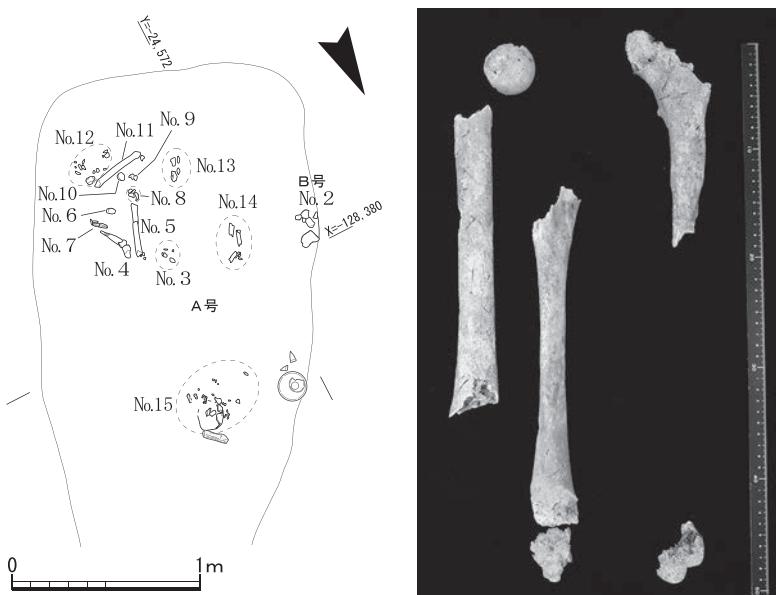
ブレグマ周辺の前頭骨と左頭頂骨（No.2）の一部が認められた。冠状縫合と矢状縫合は開放しており、頭蓋冠の厚みもかなり薄いため（ブレグマ厚2.9mm）、未成人の可能性がある。

#### 11)62号横穴(SX0212)（第11図）

右橈骨、右寛骨、右大腿骨、右脛骨などが重複していた。さらに、未成人の歯牙が混入していた。したがって、最小個体数は3体となり、成人2体、未成人1体とする。ただし、出土位置は解剖学的姿勢を保っておらず、保存状態も不良であるため、成人2体の骨を個体別に整理することは困難であった。

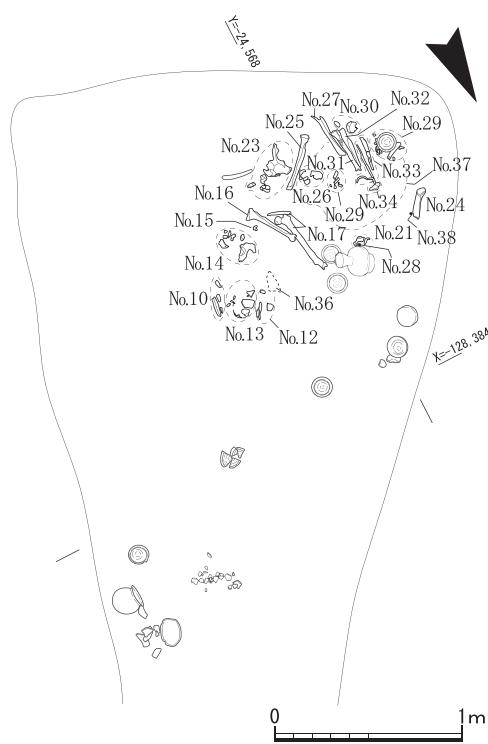
①遺存状態 頭蓋は、頭蓋冠の断片（No.13）、左右側頭骨の錐体（No.13）、右側の下顎枝前部から下顎体後部にかけてなどが確認された。歯牙については、永久歯の組み合わせと乳歯と永久歯の組み合わせの2セット認められた。

軀幹骨は、椎骨の破片（No.15,17,26,29,37）や肋骨の破片（No.34）のみが認められた。上肢骨は、右肩甲骨の棘突起（No.23）、右上腕骨の骨幹部と遠位端（No.32）、左上腕骨の骨幹部（No.29）、右橈骨の骨幹部が2体分（No.33, 35）、左尺骨の近位端（No.37）が確認された。下肢骨は、右寛骨の大坐骨切痕から寛骨臼までにかけて2体分（No.14, 23）、左寛骨の大坐骨切痕周辺部（No.30）、右大腿骨の骨幹部2体分（No.10, 27）、左大腿骨の近位端と骨幹部（No.17）、右脛骨2体分、それぞれ近位端と遠位端の一部は破損しており（No.16, 25）、左脛骨の骨幹部（No.31）、右距骨の上部（No.37）、左踵骨の上部（No.34）、右踵骨（No.26）が遺存していた。



第10図 61号横穴人骨出土状況

写真3 61号横穴A号の四肢骨



第11図 62号横穴人骨出土状況



写真4

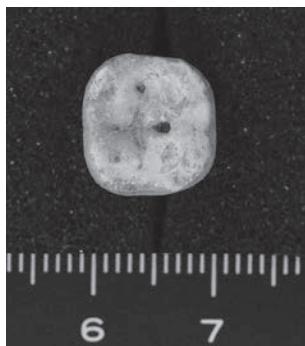


写真5

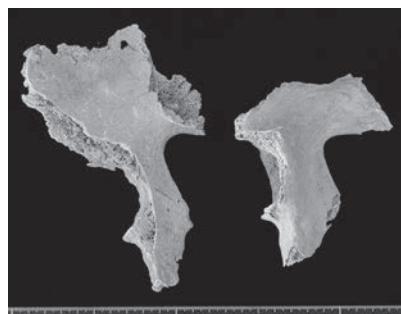


写真6



写真7



写真8

写真4 62号横穴人骨の上顎第3大臼歯(頬側面観)：歯頸部に齲蝕がみられる

写真5 62号横穴人骨の下顎第2大臼歯(咬合面観)：頬側溝に齲蝕がみられる

写真6 62号横穴人骨の右寛骨(内側面観)：左は男性、右は女性と判定された

写真7 62号横穴人骨の右脛骨(前面観)：男性と女性の個体が含まれる

写真8 62号横穴人骨の右脛骨(内側面観)：表面に骨膜炎による変形がみられる

②性別 No.14右寛骨の大坐骨切痕の形状は比較的広いのに対し(Walkerの1-2)、No.23右寛骨は比較的狭かった(Walkerの3)。前述の永久歯の組み合わせに対して、歯冠計測値に基づく判別閾数を用いた結果、女性と判定された(事前確率81.8%、事後確率76.2%で女性)。左右上腕骨最小周(No.29 57mm, No.32 59mm: 境界値59.3mm)は境界値と大差なく、左右大腿骨中央周(No.17 79mm, No.27 82mm: 境界値85mm)と右脛骨栄養孔位周(No.25 83mm: 境界値86.8mm)は若干小さかった。したがって、男性と女性が含まれている可能性が考えられた。

③年齢 永久歯の組み合わせについては、象牙質の露出は限定的であった(LovejoyのE-F)。

乳歯と永久歯の組み合わせは、第1大臼歯は未咬耗、第2大臼歯は歯冠形成途中(Coc)であった。頭蓋冠の破片については、縫合は全て開放していた。したがって、成人2体中女性個体は壮年であり、その他、4歳の幼児が含まれていると考えられた。

④所見 壮年女性に齲歯と骨膜炎が観察された。齲歯は、上顎右第3大臼歯の歯冠頬側面、下顎左第2大臼歯の歯冠咬合面に認められ、前者については歯髓腔に達していたと考えられた。骨膜炎は、右脛骨の骨幹内側面に軽度の炎症反応が認められた。

#### 12) 67号横穴(SX0218)

現場で粉化された頭骨と思われた土塊が取り上げられたが、人骨は含まれていなかった。

#### 13) 68号横穴(SX0219)(第12図)

大腿骨のみが検出された。遺存部位は少なく重複する箇所は確認されないため、単体の埋葬者とする。

①遺存状態 右大腿骨の骨幹部中央(No.3)と遠位端(No.4)のみが確認された。

②性別 保存不良のため不明とした。

③年齢 骨幹部のサイズから成人と考えられるが、詳細な年齢は不明とした。

#### 14) 69号横穴(SX0220)(第13図)

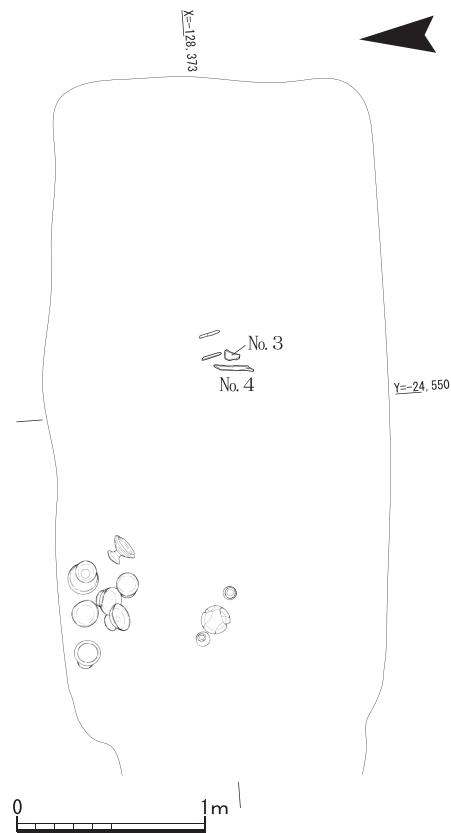
頭蓋が墓道側、四肢の遠位が奥壁側に向くように横並びに2体の人骨が検出された。左(北)側の下肢骨は、比較的明瞭に解剖学的位置が保たれており、仰臥伸展葬であったと考えられる。左側をA号、右側をB号とした。

##### A号人骨

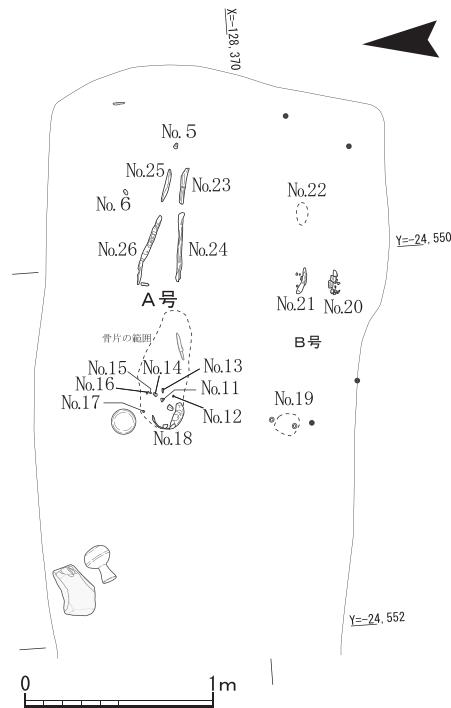
①遺存状態 頭蓋は、側頭骨の錐体(No.11-18)、前頭骨の破片(No.18)、歯牙(No.11-14,11-18)のみが確認された。

②性別 歯冠計測値に基づく判別閾値を用いた結果、男性に判定された(事前確率100.0%、事後確率100.0%で男性)。

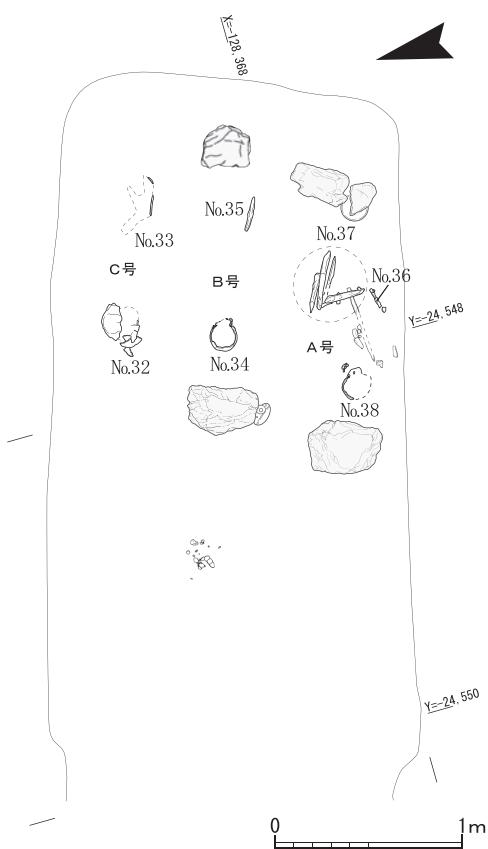
③年齢 歯冠咬耗度は、象牙質の露出が切歯で線状、第1大臼歯では点状に限られたため(LovejoyのD)、壮



第12図 68号横穴人骨出土状況



第13図 69号横穴人骨出土状況



第14図 70号横穴人骨出土状況



写真9 70号横穴B号人骨の頭蓋(後面観)：インカ骨がみられる  
No.32  
No.33  
C号  
No.34  
No.35  
No.36  
No.37  
A号  
No.38  
Y=24, 548  
Y=24, 550



写真10 70号横穴人B号人骨の上顎大臼歯(近心面観)：左は右第2大臼歯、右は左第1大臼歯。共に歯頸部に齲歎がみられる



写真11 70号横穴B号人骨の下顎骨：左は右下顎体(舌側面観)、右は左下顎体(頬側面観)。歯頸部に歯石沈着が著しい

年と推定された。

#### B号人骨)

①遺存状態 骨片と歯冠の破片のみが確認された。部位が同定できたものは、頭蓋の乳様突起付近(No.19)と犬歯の歯冠エナメル質(No.22)のみであった。

②性別 保存不良のため性別不明とした。

③年齢 繊密質の厚みから成人と考えられるが、詳細な年齢は不明とした。

#### 15) 70号横穴(SX0221)(第14図)

頭蓋が墓道側、四肢が奥壁側に横並びに3体の人骨が検出された。右(南)側の下肢骨は、比較的明瞭に解剖学的位置が保たれており、膝を屈曲させた側臥の状態で埋葬されたと考えられる。したがって、右側をA号、中央をB号、左側をC号とした。また、A号人骨の頭蓋と共に遊離歯として検出された下顎切歯の歯冠は、形成途中であった(Cr1/2)。したがって、1～2歳の幼児が混入していたと考えられる。

#### A号人骨)

①遺存状態 頭蓋は、後頭骨の鱗状部、左頭頂骨のラムダ周辺部、左右側頭骨の錐体(No.38)、下顎骨の結合部と左臼歯の歯槽骨(ラベルなし)が確認された。ラベルなしの骨と歯牙は、接合状態によってA号人骨のものであることが分かった。

長管骨の破片の中から、左大腿骨の骨幹部と右脛骨の骨幹部(No.37)のみが確認された。

②性別 外後頭隆起厚(23mm:境界値15.7mm)と右脛骨骨体最小周(81mm:境界値71.1mm)は大きく、男性の可能性が高かった。

③年齢 歯冠咬耗度は象牙質の露出はほとんどみられなく(LovejoyのC)、矢状縫合とラムダ縫合は開放しているため、壮年と推定された。

#### B号人骨)

①遺存状態 脳頭蓋の後方1/3および下顎体のみが遺存しており(No.34)、四肢骨は認められなかった。

②性別 外後頭隆起厚(15.5mm:境界値15.7mm)、乳様突起長(23mm:境界値26.4mm)、乳様突起幅(11mm:境界値11.7mm)は、男女の境界値に近似しており、判定は難しかった。したがって、歯冠計測値に基づく判別関数を用いた結果、女性の可能性が示された(事前確率71.8%、事後確率100.0%で女性)。

③年齢 歯冠咬耗度は象牙質の露出はほとんどみられなく(LovejoyのC)、矢状縫合とラムダ縫合は開放しているため、壮年と推定された。

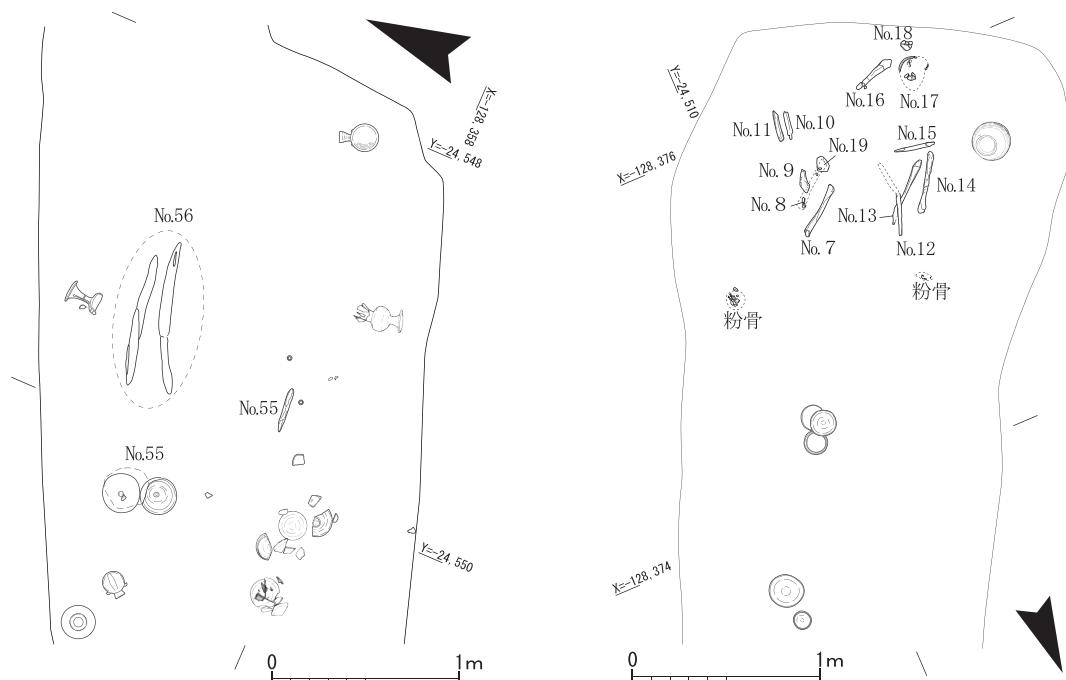
④所見 インカ骨がみられた。また、上顎右第2大臼歯と左第1大臼歯の隣接面に齲蝕、下顎左小臼歯に歯石が発達していた。

#### C号人骨)

①遺存状態 左右頭頂骨の矢状縫合周辺部および左右側頭骨の錐体(No.32)が認められた。

②性別 骨が保存不良であるため、歯冠計測値に基づく判別関数を用いたが、明瞭な傾向は認められなかった(事前確率79.1%、事後確率55.0%で女性)。したがって、性別不明とした。

③年齢 歯冠咬耗度は、エナメル質だけに留まっており、第3大臼歯は未咬耗であった。また、矢状縫合は開放していた。したがって、壮年前半と推定されたが、10代後半の可能性も除外でき



第15図 72号横穴人骨出土状況

第16図 77号横穴人骨出土状況

ない。

### 16) 72号横穴(SX0223)(第15図)

歯牙と骨片のみが確認された。歯牙15点は歯種が重複しておらず、摩耗などの特徴に矛盾がないため、単体の埋葬者と考えられる。

①遺存状態 骨片は破片もしくは粉状化しており、側頭骨の錐体(No.54)、大腿骨もしくは上腕骨骨幹部の破片(No.55)のみが確認された。

②性別 骨が保存不良であるため、歯冠計測値に基づく判別関数を用いた結果、男性の可能性が高かった(事前確率81.1%、事後確率99.0%)。

③年齢 第3大臼歯が萌出直後であるため、壮年前半の範囲に収まると考えられた。ただし、10代後半の可能性も除外できない。

### 17) 77号横穴(SX0404)(第16図)

頭蓋骨と四肢骨が確認された。右大腿骨が3体分あり少なくとも3人の埋葬者が存在したと考えられる。四肢骨の出土状況は、左(東)側と右(西)側に分かれ、奥壁近くから頭蓋骨が出土していた。頭蓋骨がどちらの四肢骨に対応するのか判断は難しいものの、比較的近距離にある右側四肢骨のものとした。したがって、頭蓋骨と右側の四肢骨をA号、左側の四肢骨をB号、その他、B号人骨に混入していた別個体の右大腿骨(No.9)をC号とした。

#### A号人骨)

①遺存状態 頭蓋は、左頭頂骨のブレグマ周辺部、後頭骨の外後頭隆起、左右側頭骨の錐体と下顎窩、後頭骨の右後頭顆が確認された(No.17)。四肢骨は、右大腿骨の骨幹部(No.13)と左右不明の脛骨骨幹部(No.15)が確認された。

②性別 右大腿骨骨体中央周(74mm:境界値85.3mm)は小さく、女性の可能性が高かった。

③年齢 冠状縫合は開放しているため、壮年もしくは熟年の範囲に収まるも



凡例：I 切歯、C 犬歯、P 小臼歯、M 大臼歯、m 乳臼歯、○ 齒槽開放、△ 歯根のみ、・遊離歯、／ 欠損、（）未萌出

第17図 出土人骨の歯式一覧

のと考えられた。

#### B号人骨)

- ①遺存状態 左右大腿骨の骨幹部(No.11,7)と右脛骨の骨幹部(No.10)が確認された。
- ②性別 大腿骨骨体中央周(左83.5mm,右84mm;境界値85.3mm)は男女の境界値に近似するため、性別判定は困難であった。
- ③年齢 骨幹部の太さと筋付着部の発達から成人と考えられるが、詳細な年齢区分は困難であった。

#### 4 . 総 括

総じて人骨の保存状態は不良であるため、抽出できた形態学的情報は限られたものの、性別と年齢などの基礎情報だけでも当時の葬送行為を理解する上で重要な知見になるだろう。中世に再利用された32号横穴(SX0103)を除外すれば、未成人は3体と全体の1割強であり(N=23)、最小年齢は1~2歳であった(70号横穴)。当時の乳幼児の死亡率の高さを考慮すれば不自然に少なく、未成人の埋葬に何らかの選択が為されたものと思われる。1~2歳未満の乳児は、成人と同様に埋葬されなかつた可能性が考えられた。性別は、男性7体、女性4体、不明13体と若干男性が多い傾向がみられた。複数埋葬者が確認された横穴については、性別や年齢に偏りはみられなく、家族墓の様相を呈していた(61号、62号、70号横穴)。また、43号横穴では、入口部閉塞土の土層から追葬があったことが指摘されているが(京都府埋蔵文化財調査研究センター 2018)、最小個体数は1体であった。人骨は保存不良のため、別個体を検出できなかつた可能性も考えられる。

生活痕などについては、人骨の保存不良のためデータを得ることは難しかったものの、壮年女性2体に4点ほどの齶歯が観察された(3.9%, N=102)。当時の食性や性分業を知るうえで貴重な所見になるかもしれない、今後、当地域にて資料が追加されることが望まれる。

(おかげさき・けんじ=鳥取大学 医学部 解剖学講座)

注1 出土状況図の作成と全体の調整は、(公財)京都府埋蔵文化財調査研究センター加藤雅士が行った。

#### 参考文献

- 馬場悠男 (1991) 人体計測法2: 人骨計測法－人類学講座 別巻1. 雄山閣, 東京.
- Bruzek J. (2002) A method for visual determination of sex, using the human hip bone. American Journal of Physical Anthropology, 117: 157-168.
- Buckberry J.L. and Chamberlain A.T. (2002) Age estimation from the auricular surface of the ilium: a revised method. American Journal of Physical Anthropology, 119: 231-239.
- Buikstra J.E. and Ubelaker D.H. (1994) Standards for data collection from human skeletal remains. Proceedings of a seminar at the Field Museum of Natural History. Arkansas archeological survey research series No. 44, Arkansas.
- 埴原和郎 (1952) 日本人男性恥骨の年齢的変化について. 人類学雑誌, 62: 245-260.
- Hillson S.W. (1996) Dental Anthropology. Cambridge University Press, Cambridge.
- Igarashi Y., Uesu K., Wakebe T., and Kanazawa E., 2005. New method for estimation of adult skeletal age at death from the morphology of the auricular surface of the ilium. American Journal of

- Physical Anthropology, 128: 324-339.
- Koizumi K. (1982) The estimation of age from the cranial sutures by means of multivariate analysis methods. Journal of Anthropological Society of Nippon, 90: 109-118.
- 京都府埋蔵文化財調査研究センター (2004) 京都府遺跡調査報告書第34冊〔女谷・荒坂横穴群〕. 京都.
- 京都府埋蔵文化財調査研究センター (2018) 京都府遺跡調査報告集第171冊〔(1) 松井横穴群第1~4次(2) 向山遺跡第2次〕. 京都.
- Lovejoy C.O. (1985) Dental wear in the Libben population: its functional pattern and role in the determination of adult skeletal age at death. American Journal of Physical Anthropology, 68: 47-56.
- Lovejoy C.O., Meindl R.S., Pryzbeck T.R., and Mensforth R.P. (1985) Chronological metamorphosis of the auricular surface of the ilium: a new method for the determination of adult skeletal age at death. American Journal of Physical Anthropology, 68: 15-28.
- Lukacs J.R. (1989) Dental paleopathology: methods for reconstructing dietary patterns. In: Iscan M.Y., Kennedy K.A.R. (eds.), Reconstruction of Life from the Skeleton. Alan R. Liss, Inc, New York, pp. 261-286.
- Matsumura H. (1990) Geographical variation of dental characteristics in the Japanese of the protohistoric Kofun period. Journal of the Anthropological Society of Nippon, 98: 439-449.
- Meindl R.S. and Lovejoy C.O. (1985) Ectocranial suture closure: a revised method for the determination of skeletal age at death based on the lateral-anterior sutures. American Journal of Physical Anthropology, 68: 57-66.
- 中橋孝博 (1988) 古人骨の性判定法. 日本民族・文化の生成 (永井昌文教授退官記念論文集). 六興出版, 東京, pp. 217-233.
- 岡崎健治 (2005) 歯冠サイズに基づく未成人骨の性判定: 性差の集団間変異の検討と出土人骨への応用. Anthropological Science (Japanese Series), 113: 139-159.
- Okazaki K. (2010) Developmental perspectives on neurocranial proportions in Japan. HOMO, 61: 314-336.
- Okazaki K. and Nakahashi T. (2011) Developmental variation in facial forms in Japan. Anthropological Science, 119: 49-65.
- Okazaki K., Tsai P.Y., and Lu K.S. (2013a) Sex difference in oral disease of millet agriculturalists from the Take-vatan lineage of the recent Bunun tribe of Taiwan. Anthropological Science, 121: 105-113.
- Okazaki K., Wei D., and Zhu H. (2013b) Variations in oral health of millet agriculturalists from the Middle Neolithic to the Sixteen Kingdoms period in the northern "Great Wall" region of China. Anthropological Science, 121: 187-201.
- Phenice J.W. (1969) A newly developed method of sexing the pelvis. American Journal of Physical Anthropology, 30: 297-301.
- 清家章 (2010) 古墳時代の埋葬原理と親族構造. 大阪大学出版会, 大阪.
- 平良泰久 (1975) 南山城の後期古墳と氏族. 京都考古, 14. 京都考古刊行会, pp1-5.
- Takahashi H. (2006) Curvature of the greater sciatic notch in sexing the human pelvis. Anthropological Science, 114: 187-191.
- 田中良之 (1995) 古墳時代親族構造の研究. 柏書房, 東京.
- Todd T.W. (1920) Age changes in the pubic bone: 1. the white male pubis. American Journal of Physical Anthropology, 3: 467-470.
- 和田晴吾 (1992) 群集墳と終末期古墳. 新版古代の日本5 (近畿I). 角川書店, pp325-350.
- Walker P.L. (2005) Greater sciatic notch morphology: sex, age, and population differences. American Journal of Physical Anthropology, 127: 385-391.
- White T.D. and Folkens P.A. (2005) The human bone manual. Academic Press, Cambridge.

## 屋外排水溝をもつ竪穴建物 —弥生時代後期の男山～枚方丘陵を中心に—

小池 寛・増田孝彦・川上晃生

### 1. はじめに

八幡市に所在する美濃山遺跡は、生駒山地の北端に位置する標高約52mの男山丘陵上に所在する弥生時代から奈良時代の複合遺跡である。発掘調査の結果、弥生時代後期と古墳時代後期の竪穴建物や飛鳥時代の道路、奈良時代の掘立柱建物を検出した。特に、弥生時代の竪穴建物は、方形建物7基、円形建物9基、多角形建物1基を検出した。一方、当該遺跡から北東400mには方形・円形・多角形の竪穴建物を33基検出した美濃山廃寺下層遺跡が所在している。両者の存続時期は、出土土器から弥生時代後期中葉～後葉に比定できるものの、集落構造や屋外排水溝などの共通点が認められる。両遺跡の竪穴建物のあり方から美濃山丘陵上の未調査部分にも数多くの竪穴建物が分布している可能性があり、南山城地域を代表する弥生時代後期の集落遺跡と言える(第1図)。

本稿は、令和元年度に実施した当調査研究センター共同研究事業「美濃山遺跡における竪穴建物の構造及び出土遺物からみた集団関係－弥生時代後期を中心にして－」の研究成果報告である。

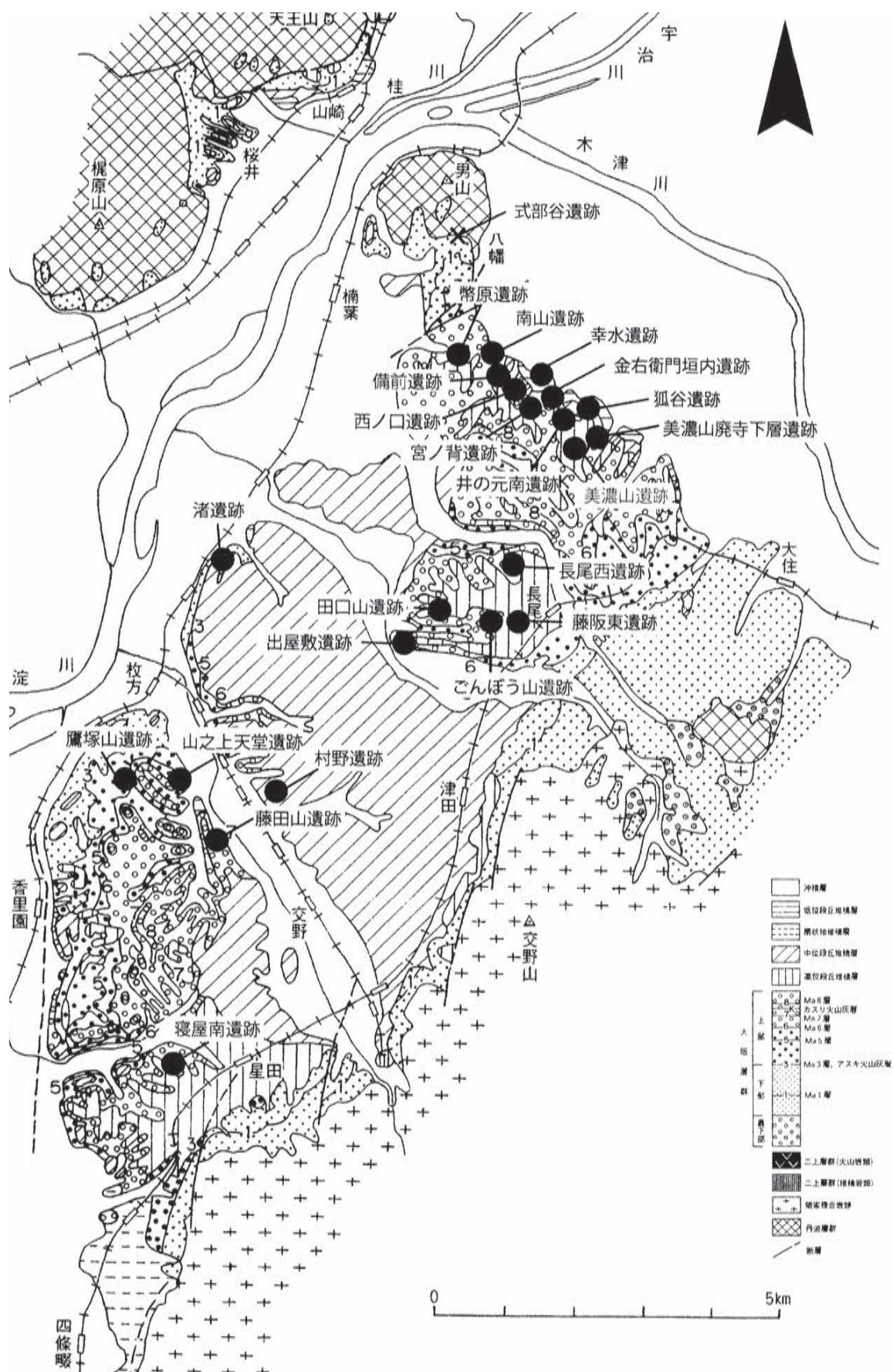
### 2. 美濃山遺跡における屋外排水溝を有する竪穴建物

美濃山遺跡で検出した竪穴建物には円形・方形・多角形の建物があり、大半の建物には屋外排水溝が設置されている。代表的な竪穴建物について概観しておきたい(第2・3図)。

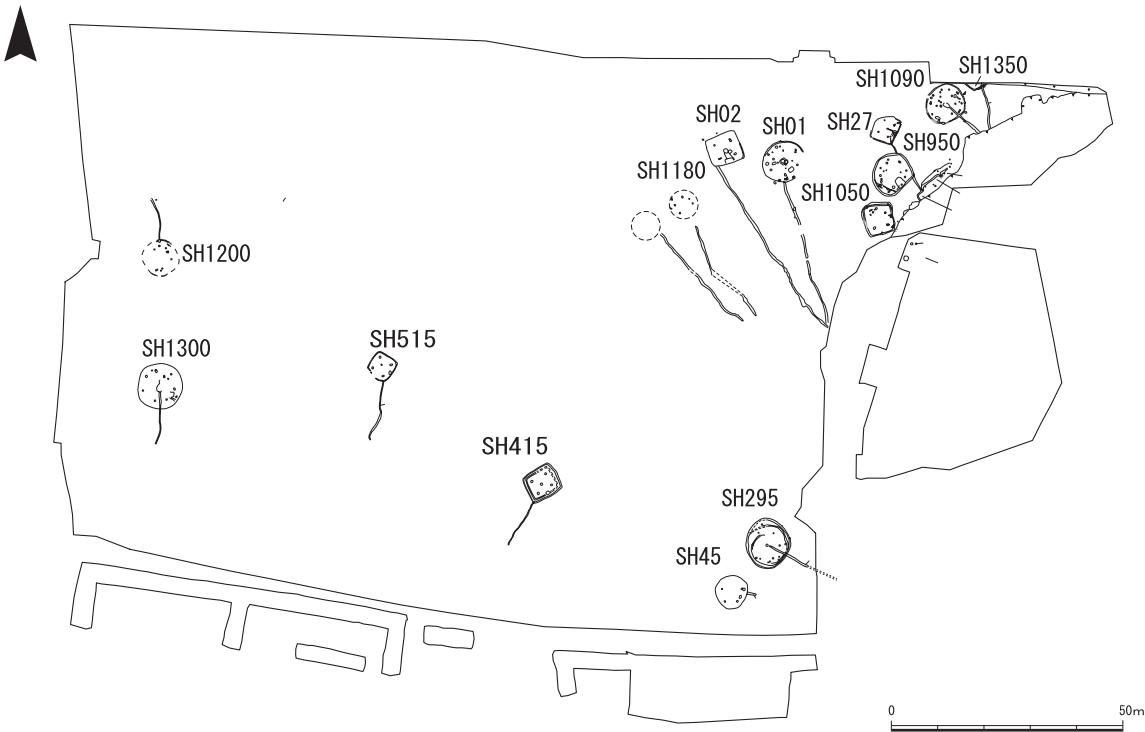
竪穴建物SH1300は、直径9.4mを測る不整な円形竪穴建物である。建物の中央土坑から南方に位置する谷部に向かって11.9mの屋外排水溝が延びており、美濃山1-1類に分類できる。この竪穴建物の東方49mに位置する一辺約5.5mの方形竪穴建物SH515と東方86mに位置する一辺7mの方形竪穴建物SH415は、建物の南隅を南方に広がる谷部に向けて造られており、その隅部から各々14m・11mの残存長を測る屋外排水溝が谷部に向かって設置されている。いずれも美濃山2-2類に分類できる。なお、屋外排水溝の方向と検出した谷部の存在から当該集落の南限を想定することができる。

一方、先に述べた竪穴建物SH1300の北方29mに位置する直径7mの竪穴建物SH1200の屋外排水溝は、残存長9mを測り、円形建物の周壁溝から北方に広がる緩傾斜に向かって延びており、美濃山1-2類に分類できる。これらから当該建物の60～70m北方に傾斜変換線があり、そのあたりに集落の北限が想定できる。

また、集落の東方に位置する竪穴建物群の屋外排水溝は、全て南東方向に設置されており、地



第1図 男山丘陵から枚方丘陵の弥生時代後期集落分布図（市原実編 1994『大阪層群』に加筆）



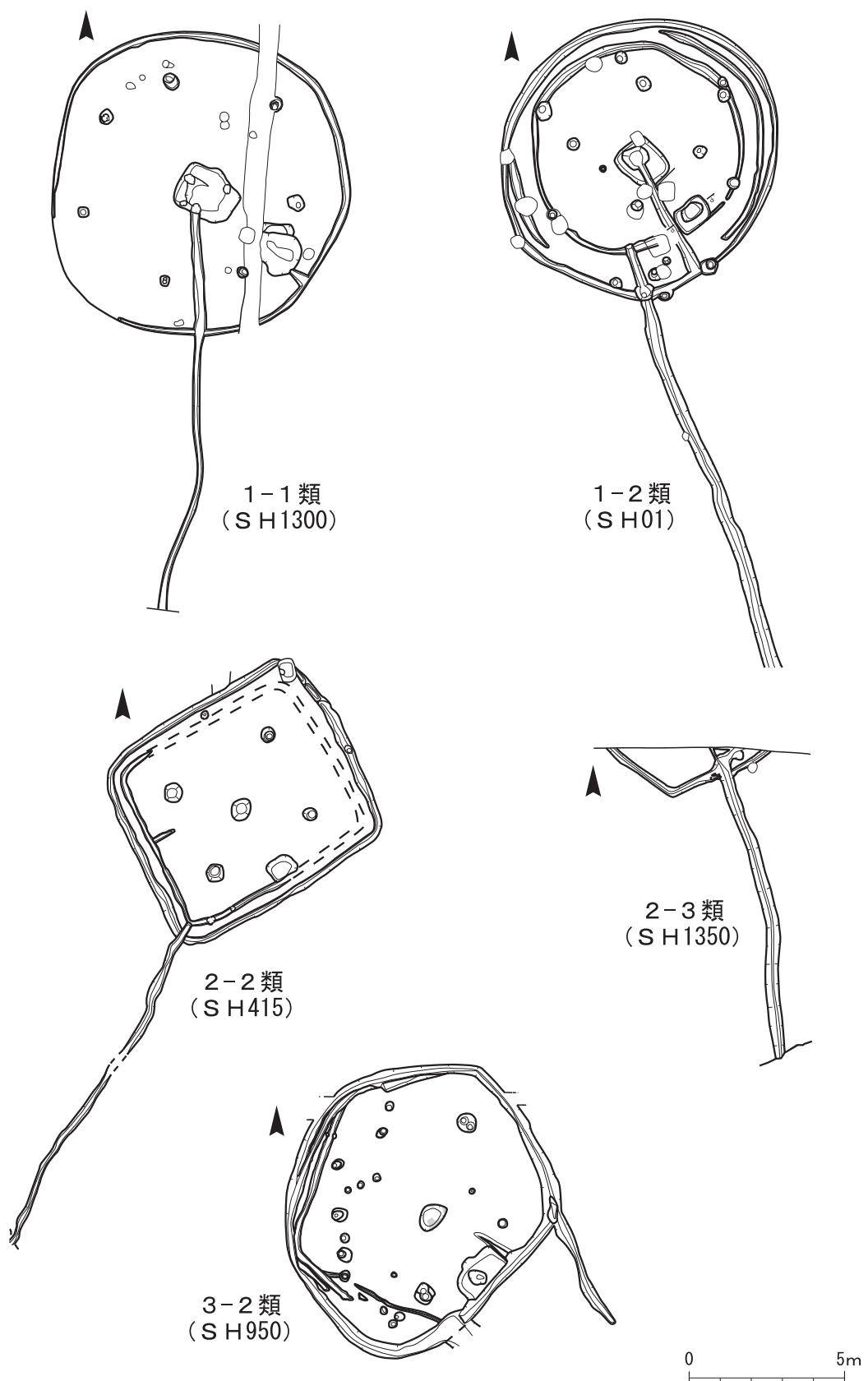
第2図 八幡市美濃山遺跡弥生時代竪穴建物分布図

付表 屋外排水溝の設置位置からの類型表

類型名称	平面プラン	屋外排水溝の位置	美濃山事例
1-1類	円形プラン	中央(土坑)から延びる	SH1300
1-2類		周壁溝から延びる	SH01
2-1類	方形プラン	中央(土坑)から延びる	未検出
2-2類		周壁溝の隅部から延びる	SH415
2-3類		周壁溝の辺から延びる	SH1350
3-1類	多角形プラン	中央(土坑)から延びる	未検出
3-2類		周壁溝の隅部から延びる	SH950
3-2類		周壁溝の辺から延びる	未検出

形の傾斜面が東隣接地に広がっていることが想定できる。竪穴建物 SH01は、直径9.7mを測る円形建物で、周壁溝から約20mの屋外排水溝が延びており、美濃山1-2類に分類できる。また、当該建物の西方14m地点に位置する一辺8mの方形竪穴建物 SH02は、傾斜地側に建物の南辺を向け、南隅の周壁溝から43mにも及ぶ屋外排水溝が設置されており、美濃山2-2類に分類できる。なお、排水溝の端部で、先に述べた竪穴建物 SH01の排水溝が合流しており、同時期性を示している。一方、直径7m→7.5m→9mへと2回の建て替えが行われた円形竪穴建物 SH295は、中央土坑から東に残存長9mの屋外排水溝が設置されており、美濃山1-1類に分類できる。拡張を意図した建て替えであっても、中央土坑からの屋外排水溝は踏襲されていることが確認できた。

竪穴建物 SH950は、一辺6m×6.5mの多角形の竪穴建物(美濃山3-2類)から直径9.5mの不整な円形建物(美濃山1-2類)への建て替えが確認できた。屋外排水溝は、東隅から南東方向に設



第3図 美濃山遺跡堅穴建物実測図

置されているが、周壁溝はそのまま利用するように拡張による付け替えは認められない。一方、その建物の1.5m北に位置する一辺3.5mの方形竪穴建物 S H27(美濃山2-2類)の隅部から南東方向に延びる屋外排水溝は、先に述べた竪穴建物 S H950の周壁溝と接続している。

以上のように全ての竪穴建物に屋外排水溝が設置されていることが確認できた。報告書の分析を待たねばならないが、各々の竪穴建物には、若干の時期差があることが、出土遺物から把握されている。

### 3. 長尾～枚方丘陵での類例

#### 枚方市ごんぼう山遺跡

長尾谷・藤阪北町に所在する弥生時代から古墳時代の集落遺跡である。方形の第1号竪穴建物の南西隅から屋外排水溝が延びている。美濃山2-2類に属するが、屋外排水溝の幅は極端に細く、溝の深さには問題がないものの、排水機能面ではやや疑義が残る。出土土器には円形浮文を有する壺、底部輪台技法によって成形された甕、高杯などが出土している。

#### 枚方市星丘西遺跡

星丘に所在する弥生時代中期後半の集落遺跡である。竪穴建物1基と溝、土壙墓、土坑などを検出している。また、弥生土器や石鎌、剥片などが出土している。2基の円形竪穴建物が切りあっており、建て替え以前の建物には屋外排水溝は設置されていないが、建て替え後の建物には、中央土坑から屋外排水溝が延びており、美濃山1-1類に分類できる。

#### 枚方市田口山遺跡

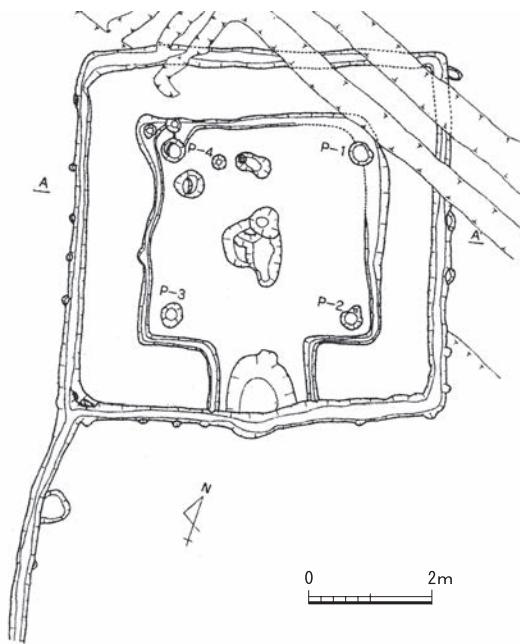
標高50mを測る田口山丘陵上に営まれた弥生時代後期の高地性集落遺跡である。円形の竪穴建物の周壁溝から屋外排水溝が掘られており、美濃山1-2類に属する。

#### 枚方市茄子作遺跡

弥生時代後期後半の集落と方形周溝墓が検出されている。方形・円形竪穴建物は13基確認されており、円形竪穴建物を方形プランに建て替えている。屋外排水溝は円形竪穴建物の周壁溝から延びており、美濃山1-2類に分類でき、方形竪穴建物にも再利用されていることから分類上は、同2-2類に分類できる。出土遺物としては、弥生土器の壺・甕・高杯・器台、砥石などが多く出土している。

#### 枚方市藤阪東遺跡(第4図)

藤阪中町・北町に所在する藤阪東遺跡では、方形の第19号住居跡において南西隅から屋外排水溝が南へ延びる。床面にはベッド状遺構があ



第4図 枚方市藤阪東遺跡第19号竪穴建物実測図



第5図 寝屋川市寝屋南遺跡遺構配置図

る。美濃山2-2類に分類できる。また、方形の第20号住居跡においても概ね南隅から屋外排水溝が確認されており、美濃山2-2類に分類できる。一方、円形の第21号住居跡では、豎穴建物の周壁溝と屋外排水溝の接点は失われているが、豎穴建物の床面には排水溝を検出していないことから、周壁溝から屋外排水溝が延びていたと判断でき、美濃山1-2類に分類できる。出土土器には、壺・甕・高杯などがある。

#### 枚方市鷹塚山遺跡

枚方市鷹塚山遺跡C地区において、方形住居の中央土坑から北東隅に向けて屋外排水溝が延びており、美濃山2-1類に分類できる。出土した土器には、底部穿孔の鉢や台付甕、長頸壺、手焙形土器、近江系鉢や高杯がある。当該類型は、美濃山遺跡においては未検出である。

#### 寝屋川市寝屋南遺跡(第5図)

寝屋川市寝屋南遺跡では、約10基の住居のうち、2基に屋外排水溝がみられる。隣接する豎穴建物003・005は、正反対の方向に屋外排水溝が延びており、おのおの、谷地形へと排水していることが分かる。方形豎穴建物003は、北隅の周壁溝から屋外排水溝が延びており、美濃山2-2類に分類できる。一方、方形豎穴建物005は、概ね南隅の周壁溝から屋外排水溝が延びており、豎穴建物003と同じく美濃山2-2類に分類できる。屋外排水溝をもつ豎穴建物は、この2基だけであり、屋外排水溝の有無が、豎穴建物の機能と何らかの関係があるか否かは、依然として不明である。

なお、出土土器の中には胎土の色調が赤褐色を呈する円形の穿孔部を持つ器台が美濃山遺跡・出屋敷遺跡・寝屋南遺跡で確認されており、共通する要素として捉えることができる。弥生土器は、基本的には在地の土器に見られる淡褐色の色調を呈する個体が多くみられることから、この器台は他地域からの搬入土器とも考えられる。現在、その搬入元は特定できていない状況である。

その他、弥生時代後期に比定できる枚方市長尾西遺跡では方形豎穴建物の隅部から屋外排水溝が延びる美濃山2-2類と、円形豎穴建物でありながら2辺の直線的な周壁溝の隅部から屋外排

水溝が延びる例が報告されている。なお、屋外排水溝が近接する方形建物の辺中央に連接する特異な事例が見られる。屋外排水溝が有する機能を考えるうえで重要である。枚方市村野遺跡においても方形竪穴建物に2-2類と2-3類が混在する状況が見られる。

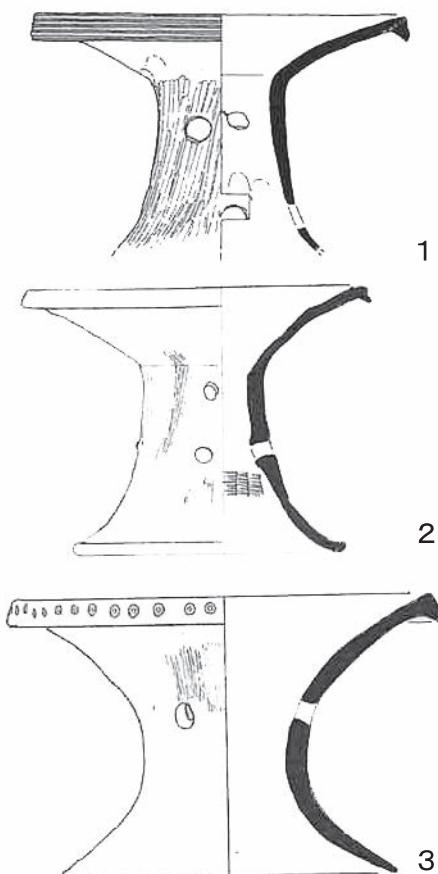
以上、見てきたように標高40~60mを測る八幡市男山丘陵から枚方・寝屋川丘陵にかけて屋外排水溝を有する竪穴建物が多数存在することが確認できた。これらの遺跡が所在する丘陵は、大小の谷地形が入り込む複雑な地形である。しかし、直線距離でわずか11kmの範囲内に所在していることから、日常的な地域間交流が盛んであったことをこの屋外排水溝が示しているのであろう。

#### 4. むすび

今回の資料調査では、屋外排水溝がある竪穴建物に焦点を当て、排水溝の共通性について資料調査を行った。その結果、美濃山遺跡と枚方市・寝屋川市域で確認される屋外排水溝を有する竪穴建物は、住居の規模に大きな差異はなく、住居が位置する地点より低い谷部へ屋外排水溝を延ばす特徴が認められた。また、美濃山遺跡での9類型は、時期差や変遷を表すものではなく、同一集落内に混在していることも確認できた。現時点で屋外排水溝の有無や9類型が何に起因するのか、明確な根拠を示せない状況である。ただ、これらの竪穴建物は、高位段丘堆積層から大阪層群最下部の範囲内に位置することから、住居の基盤である堆積層の地質、具体的に言えば、降雨の含水性が非常に低い基盤層上に集落が立地していることと密接に関係するのではないかと思われる。一方、住居中央土坑から延びる屋外排水溝と周壁溝から延びる屋外排水溝が、美濃山遺跡や枚方市・寝屋川市域で混在することは、日常的な地域間交流がさかんに行われていたことを示すのではないかと考えられる。今回は、出土土器について、あまり触れられなかったが、器形や器台の胎土に共通性も見受けられる。このことから、住居形態のみならず一部の弥生土器の搬入元や用途においても、共通性があるとみられる。

なお、これらの地域間の共通性としては、弥生時代の屋外排水溝のみならず、今まで大阪府内での横穴墓が高井田山横穴群だけであったが、枚方市アゼクラ遺跡でも横穴墓が発見され、男山丘陵に所在する女谷・荒坂横穴群や松井横穴群との共通性が確認されている。

また、奈良時代の美濃山廃寺と枚方市の九頭神廃寺の中心建物の構造的な共通性や平安時代の



1 美濃山遺跡 2 寝屋南遺跡 3 出屋敷遺跡  
第6図 弥生土器器台実測図 (1/4)

京都市西寺銘が押圧された平瓦の生産など、時代に關係なく様々な共通性が、南山城と北河内間で認められることを指摘しておきたい。

(こいけ・ひろし=調査課長)

(ますだ・たかひこ=調査課調査第2係副主査)

(かわかみ・こうせい=奄美市立奄美博物館学芸員)

#### 参考文献

- 中川和哉 2020「弥生時代後期の屋外排水溝を備える堅穴住居—八幡市美濃山遺跡を中心に—」第143回埋蔵文化財セミナー「弥生時代の住宅事情—弥生人の住まいの実像に迫る—」発表資料 公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 枚方既製服団地調査委員会 1970『大阪府枚方市ごんぼう山弥生遺跡発掘調査報告書』
- 財団法人枚方市文化財研究調査会 1988『図録・枚方の遺跡』
- 枚方市水道局・枚方市教育委員会・鷹塚山遺跡発掘調査団 1968『大阪府枚方市鷹塚山弥生遺跡調査概要報告』
- 枚方市教育委員会・財団法人枚方市文化財研究調査会 1981『出屋敷遺跡調査概要報告』
- 大阪府東部公園事務所・財団法人枚方市文化財研究調査会 1968『出屋敷遺跡II調査概要報告』
- 財団法人枚方市文化財研究調査会 2002『藤阪東遺跡II 第7次発掘調査概要報告書』
- 財団法人枚方市文化財研究調査会 2009『寝屋南遺跡—寝屋南地区土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—』
- 八幡市教育委員会 1988『美濃山廃寺下層遺跡発掘調査概報』
- 八幡市教育委員会 2013『美濃山廃寺下層遺跡(第11次)発掘調査報告書』
- 公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター 2014『美濃山廃寺下層遺跡第8次発掘調査報告』



写真 屋外排水溝をもつ堅穴建物 SH01（左）と SH02（右）

## 西外古墳群の研究(中)

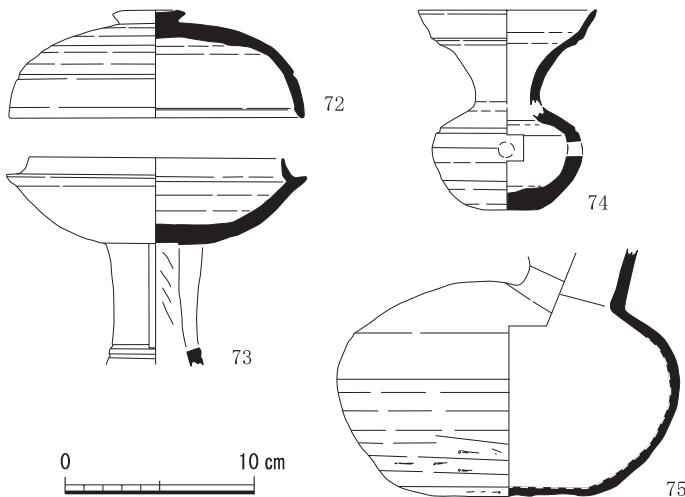
桐井理揮・肥田翔子・木村結香

## 4. 出土遺物の概要(補遺)

<sup>(注16)</sup> 前稿以降、西外古墳群出土とされる遺物が大宮壳神社と京都府立峰山高校にも保管されていることを知った。そのため、ここでは補遺として、それらの遺物の概要を記しておきたい。<sup>(注17)</sup>

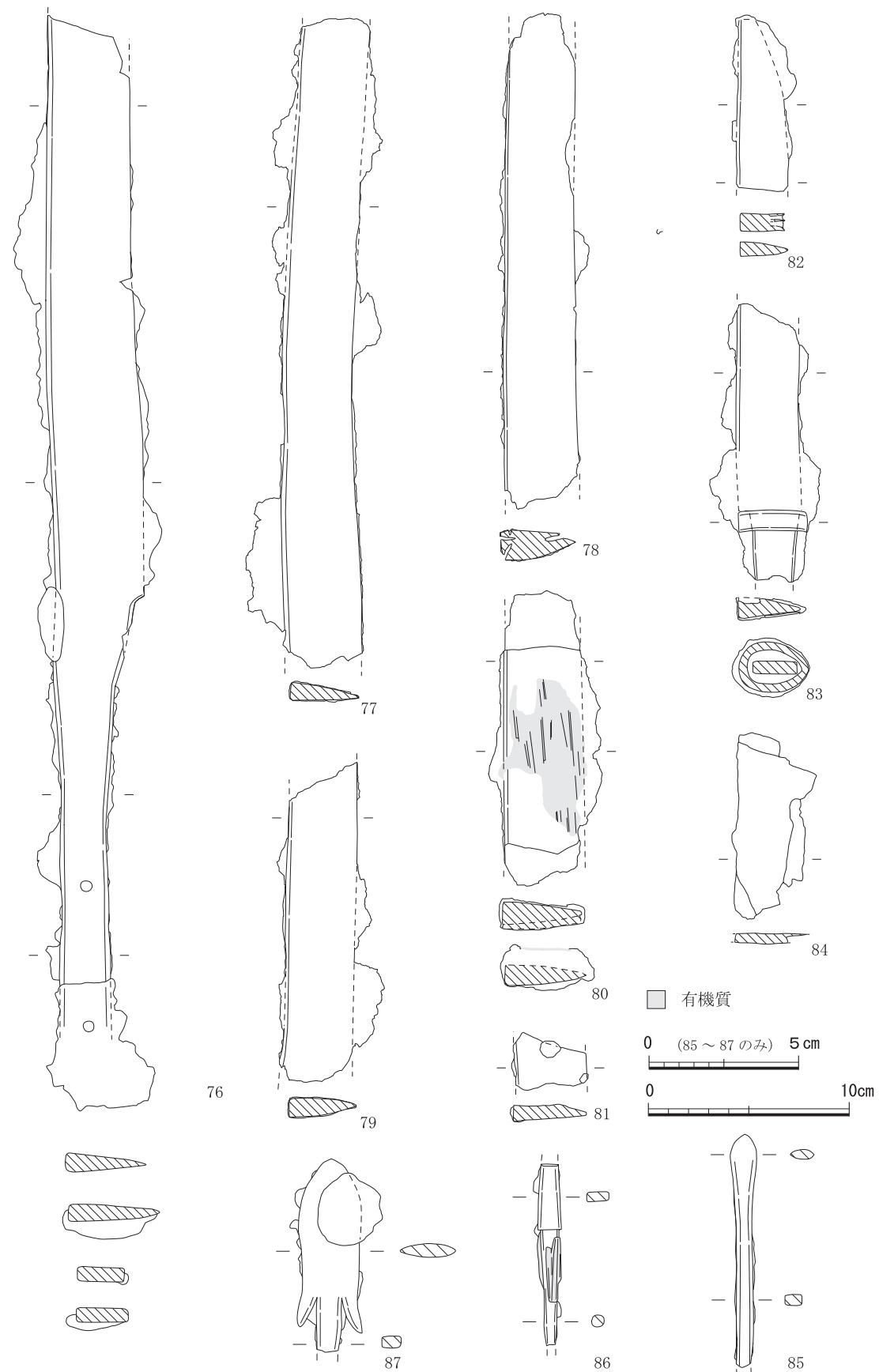
**須恵器** 72~74は大宮壳神社に保管されている須恵器である。いずれも「昭和一八.四.一八三重村西外出土」と朱書きされており、27~32の京都府立丹後郷土資料館に保管されているものと同時に採取されたものであろう。72はやや歪な形の杯蓋で、つまみは中央部から外れた位置に取り付く。口縁端部はやや肥厚させるように段が付く。73は長脚で2段3方向の透かしを持つ有蓋高杯である。74は壺である。体部と口縁部の接点はないが同一個体と考える。焼成が甘く、軟質。75は峰山高校に保管されている平瓶である。口縁部を欠く以外は完存する。底部に「67.8 西外坪倉」の注記が認められる。この平瓶は付表1-③で1号墳とされた遺物であろう。

**鉄刀** 鉄刀はすべて破片で10点あり、その内9点を図化した。関をもつ破片が2点あることから、少なくとも2個体が存在したと考えられる。76は茎から刀身下部が残る。片関とみられ、茎には目釘孔が2か所に確認できる。77~81は刀身片で、80には鞘とみられる木質が表面に残存する。82は切先の破片、83は茎から刀身にかけての破片である。鍔を装着し、両関とみられる。84は刀破片とみられるが、依存状態に恵まれない。刀身幅をみると76~81が3.5~4.5cmであるのに対しても82・83はやや細身で、82が2.5cm、83が3.1cmである。したがって、76~81は大刀で、82・83は小刀であったと考えられる。



第8図 土器実測図③(1/4)

**鉄鎌** 85~87は鉄鎌で、3個体分が確認できる。<sup>(注18)</sup> 85は尖根鑿箭式鎌で、鎌身と頸部の一部が遺存する。87は平根腸抉柳葉式鎌で、鎌身と頸部の一部が遺存する。86は鎌身が欠損しており形態不明だが、頸部・茎の一部が遺存し、台形関をもつ。茎に木質が確認できる。これらは6世紀後半~7世紀前半の製品であろう。<sup>(注19)</sup>



第9図 大宮壳神社保管鉄器類実測図(1/2・1/3)

## 5. 出土場所と帰属古墳

今回の報告にあたり、1971年に須恵器等を採取した杉原和雄氏の協力を得て、現地の確認を行い、丹後郷土資料館に保管されている当時の記録の精査を行った。なお、杉原氏からの聞き取り及び資料館に残されたメモから、前稿以降、以下のことが新たに判明した。

・付表1-②の遺跡地図の西外古墳群に関する記述は、遺物採取前に坪倉氏の情報提供を基に記載したこと。

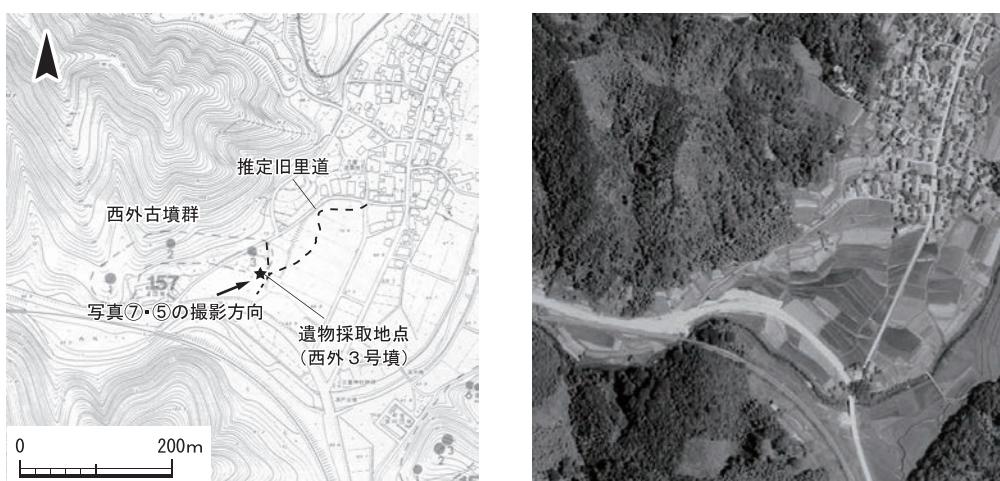
- ・杉原氏自身は1971年5月に現地確認をし、8月に多数の遺物を採取したこと。
- ・採取したのは須恵器および小型の鉄器のみであり、馬具は含まれないこと。
- ・数か所から採取したのではなく、1か所の崖面で採取したこと。
- ・1982年に峰山高校より寄託された須恵器は平瓶1点のみであったこと。
- ・1977年に大宮壳神社から寄託されたのは須恵器のみで、鉄器類は含まれていないこと。

以上情報と遺跡地図の記載から、情報を再度整理してみよう。

西外古墳群に関する最も古い記載は大宮壳神社に保管されていた須恵器に朱書きされた「昭和一八年四月一八日」という日付である。それが付表1-①では昭和26年発見となっているのは、情報元である坪倉氏による最初の発見であり、その際に鐘形馬具や鉄刀が採取されたとみられる。

付表1-②の記載も坪倉氏の情報によるらしく、坪倉氏は数度にわたり西外周辺で遺物の採取を行い、2基の古墳を確認していたのだろう。それが当初の1・2号墳にあたると考えられ、峰山高校に保管されていた平瓶の「67.8 西外 坪倉」という墨書はそのことの傍証となる。

1971年には杉原氏が現地で踏査、遺物採取を行った。⑦～⑭の写真が撮影されたのもこの時である。資料館に残されている採取時の写真と現在の地形、過去の航空写真等の検討から、杉原氏が遺物を採取した位置は現在「全壊」とされている3号墳であり、第10図のように位置を推測するに至った。写真⑨、⑩からは、切土された崖面の土色変化部分から須恵器が出土している様子を窺うことができる。壁面の分層線が引かれている土色変化が墓壙埋土であるなら、3号墳は木



左：『大宮町遺跡地図』1999に加筆、元地図は平成4年12月測図

右：国土地理院 (<https://maps.gsi.go.jp/development/ichiran.html>) 年代別の写真 (1961～1969年)

第10図 西外古墳群の位置 (1/10,000)



写真⑦ 「大宮町西外古墳 71.05.18撮」  
(奥に三重集落と旧街道が見える。手前の崖が3号墳か)



写真⑧ 「この崖から須恵器、鉄斧表採」  
(写真⑦と同日撮影。3号墳を北東から見た写真)



写真⑨ 「須恵器、鉄斧出土地点」  
(1971.8撮影か。崖面の土色変化からの遺物出土状況)



写真⑩ 「西外古墳」  
(1971.8撮影か。奥に見える遺物は25の龜か)



写真⑪ 「大宮町西外古墳 71.05.18撮」  
(1号墳の奥壁か)



写真⑫ 「大宮町西外古墳 71.05.18撮」  
(1号墳の奥壁および側石か)



写真⑬ 「大宮町西外古墳 71.05.18撮」  
(1号墳の石室の入口)



写真⑭ 「大宮町西外古墳 71.05.18撮」  
(1、3号墳とは別地点。西外古墳群周辺か)

写真 1971年当時の西外古墳群周辺(京都府立丹後郷土資料館提供)

棺直葬墳であったと考えられる。なお、写真⑧の注記には「この崖から須恵器、鉄斧出土」とあり、第2図の「西外2 71.5」「西外2 71.8」とネーミングされた須恵器の多くと、65の鉄斧は3号墳に伴うとみて間違いない。

ただし、付表1-⑤の遺跡地図の情報からは、3号墳からは「馬具」が出土したとされる。この経緯は第2章で整理した通りであるが、実際の位置はともかく、内容は付表1-④の遺跡地図が正しく、2号墳と3号墳の内容は誤認されていると考えざるを得ない。

今回提示した写真には、3号墳と同日に撮影された一群の中に、石室基底部が確認できる（写真⑪～⑬）。今回改めて踏査を行うことができていないが、1号墳は付表1-②で「横穴式石室、下部2～3段を残す」とされており、写真⑪～⑬は1号墳の可能性が高い。付表1-⑤では1号墳の埋葬施設は竪穴式石室とされているが、写真から判断すると竪穴系横口式石室であったと考えられる。なお、1号墳からは馬具、鉄刀、須恵器が出土したとされるが、これらは付表1-①の当初採取された鐘形馬具類を指す可能性が高いことはすでに述べた通りである。ここでは、以下のように各古墳の位置、埋葬施設、出土品を推測しておきたい。

1号墳 第10図・157-1 竪穴系横口式石室 鐘形馬具(33～35)、鉄刀(63)、須恵器(75)

2号墳 第10図・157-2 埋葬施設不明 馬具(不明)

3号墳 第10図・157-3 木棺直葬墳か 須恵器・土師器(1～25)、鉄斧(65)

その他の鉄器類や最初に須恵器が採取された位置は、今回得られた情報ではこれ以上追求することができない。第2章での推測とは異なる部分もあるが、ここで訂正しておきたい。

なお、今回の再整理では2号墳に関する情報を得ることができなかったが、心葉形馬具類は2号墳に伴う可能性もある。しかしながら、第2章で整理したような経緯もあり、すでに遺物が複数の古墳の出土品が混濁していることは間違いない。他のものは一括して「西外古墳群出土品」としておきたい。

（桐井）



写真⑮ 写真⑦とほぼ同じ位置から撮影。  
は場整備により当時の地形は大きく改変されている。



写真⑯ 3号墳遠景

写真 西外古墳群の現状(2021.1 桐井撮影)

## 6. 遺物の検討

西外古墳群では複数種の馬具が出土しており、金銅装の装飾馬装は2種、鐘形と三葉文心葉形の鏡板・杏葉が存在する。以下では、この2種の馬具について編年を整理しておく。

### (1) 鐘形鏡板轡・杏葉

鐘形鏡板轡・杏葉(以下、合わせて鐘形馬具とする)の編年は、これまで多くの研究者により示されており、また古墳時代の装飾馬具全体の変遷や画期が提示される中でも編年観が組みあがつてきた。<sup>(注20)</sup>これらの先学を参照しつつ、西外古墳群出土例を位置付けていくが、まず今回の整理対象について提示しておく。米田文孝は下部突起の数で、鐘形馬具を三突式・五突式に分類した。さらに米田や河上邦彦・右島和夫は文様から斜格子文系と忍冬文系分類を別系統とした。それを踏まえ本論では、五突式・斜格子文系の鐘形馬具を対象として編年的位置付けを整理する。

**金銅板の被せ方** 初期例(南塚古墳例、川上神社古墳例杏葉)では文様板・地板に金銅板別被せを施すが、他はほぼ金銅板一枚被せである。斜格子文系鐘形馬具の出現時はすでに一枚被せがf字形・剣菱形・楕円形馬具で一般化されており、斜格子文系鐘形馬具の導入期(TK10～MT85型式期)<sup>(注21)</sup>に舶載品模倣の過程で別被せが施され、その後すみやかに一枚被せが普及したものと考えられる。本例も一枚被せである。

**鉢の色・多寡** 6世紀初めに、縁金への銀被鉢繁打という定型ができるが、のちに金銅被鉢への変化と少鉢化が起こる。<sup>(注22)</sup>鉢色の変化と少鉢化は同時でない可能性もあるが、王墓山古墳例・中田1号横穴例などで鉢数が寡少になる。TK209型式期中にこれらの変化が起こるものと考えられる。本例は、金銅被鉢を寡少に打つ。

**立聞から繋への接続方法** 立聞に方形孔があり鉤金具を介すものが通有だが、立聞に方形孔がなくなり、繋を直接鉢留するものが後出して現れる。しかし本例は立聞の上に革金具を載せて鉢留によって繋を接続するという、他に見られない方法をとっており、鉢留立聞に類する後出的なものと捉えられる。鉢留立聞は、花形・心葉形・棘葉形馬具で取り入れられるものだが、意匠によってもその導入時期は異なるようTK209～TK217型式期前半に取り入れられたものとみられる。<sup>(注23)</sup>

**鏡板・銜連結部の処理方法** 銜連結部は、鏡板の縦方向銜留に、銜を掛けた部分が露出する形であったのが、鐘形馬具の登場以降キャップ状金具を使用し、銜を露出させないようになる。さらに時期が降ると、鏡板地板に銜外環の端部を直接鍛接するものが現れる。本例は、直接鍛接による連結方法を用いており、鐘形鏡板轡の中では唯一確認できるものである。

**鏡板・杏葉のともづくり化** ともづくり化は、鏡板・杏葉において形状や文様が全く同じものを使用するようになることで、花形・心葉形・棘葉形馬具を中心に現れる。花形馬具ではTK209型式期に顕在化し、棘葉形馬具でもTK209型式期に現れTK217型式期に盛行するという。本例は、鐘形馬具でみられる唯一のともづくりセットである。

**文様の退化** 鐘形馬具検討の各所で指摘されてきたが、三葉文を配する複雑な斜格子文から単純な斜格子文に変化し、文様の崩れも生じる。最下段で下縁突出に垂下する部分は、本来は三葉

付表2 五突式・斜格子文系鐘形馬具の属性

都道府県 市区町村	遺跡名	鏡板	杏葉 枚数	突起	金銅板 被せ方	銅色	縁金の鈕数 (鏡板/ 杏葉)	繫接 統	銜連 結	引手	文様構成	最下段	文様区内の 銅	時期
大阪府茨木市	南塚古墳	●	7 (三突6)	5	別被せ	銀	87/98	鉤	キヤ ップ	引手 壺	三葉文+格子/ 三葉文+格子	三葉文	三葉文上 7/8	TK10~ TM85
愛媛県東温市	川上神社古墳	●	4	5	一枚被せ/ 別被せ	銀	約70	鉤	キヤ ップ	不明	格子/ 三葉文+格子	コブ状/ 三葉文	下3列/ 三葉文上8	TK209
大阪府東大阪市	山畑33号墳	●	5	5	一枚被せ	銀	69~71	鉤	キヤ ップ	不明	三葉文+格子	三葉文	三葉文上6	MT85~ TK43
奈良県斑鳩町	藤ノ木古墳	●	大5, 小5	7/5	一枚被せ	銀	73+/ 大96, 小66	鉤	キヤ ップ	引手 壺	三葉文+格子/ 三葉文+格子	三葉文	三葉文上 8/6	TK43
埼玉県加須市	伝宮西塚古墳	●	—	5	一枚被せ	銀	66	鉤	キヤ ップ	不明	格子	コブ状	下3列	TK10~ TK43
埼玉県行田市	(埼玉地区)	●	—	5			63	(鉤)	キヤ ップ		格子	コブ状	下3列	—
神奈川県横浜市	室ノ木古墳	●	—	5	一枚被せ	銀	63	鉤	キヤ ップ	(引手 壺?)	格子	コブ状	下3列	TK209
奈良県平群町	三里古墳	●	9	5	一枚被せ	銀	37~40/ 34~48	鉤	キヤ ップ	引手 壺	格子/ 格子(ハート)	コブ状	なし	TK43
福岡県福岡市	高崎2号墳		4	5	一枚被せ		53~57	鉤	—	—	X状(ハート)	コブ状	中央1	TK43
岡山県赤磐市	岩田14号墳		5	5	一枚被せ (金銅・銀)	(金銅)	50~54	鉤	—	—	格子	コブ状	なし	TK43~ TK209
宮崎県高鍋町	持田49号墳		1	5	(一枚被せ)		54	(鉤)	—	—	格子	コブ状	なし	—
兵庫県朝来市	三町田古墳	●	5?	5	一枚被せ	銀か	42/39~46	鉤	キヤ ップ	引手 壺	格子 格子	直線	なし	
千葉県山武市	新坂1号墳	●	—	5	一枚被せ	不明	45~46	(鉤)	キヤ ップ	引手 壺	放射	直線	なし	TK43~ TK209
福岡県八女市	山の前1号墳		1	不明	一枚被せ		(多密)	不明	—	—	格子	不明	なし?	TK43~ TK209
岡山県倉敷市	王墓山古墳	●	3	5	一枚被せ	(金銅)	10?/14	(鉤)	キヤ ップ	不明	格子	コブ状	なし	TK209~ TK217
長野県飯田市	(座光寺地区)		2	5	一枚被せ	金銅	(14)	(鉤)	—	—	格子	コブ状	なし	—
長野県大鹿村	(上藏地区)		2	5	(一枚被せ)		13	(鉤)	—	—	格子			—
—	(関西大学蔵)		2	5	一枚被せ		12	(鉤)	—	—	格子	コブ・ 直線	なし	—
群馬県高崎市	(乗附町地区)	●	1	5			11	不明	キヤ ップ	不明	格子	コブ状	なし	—
福島県いわき市	中田1号横穴		4	5	一枚被せ	金銅	10	鉤	—	—	格子	コブ状	なし	TK209~ TK217
群馬県前橋市	(旧南橘村地区)		3	5	一枚被せ	金銅	6	鉢	—	—	格子	コブ状	なし	—
京都府京丹後市	西外1号墳	●	1	5	一枚被せ	金銅	7	金具 鉢留	鍛接	不明	格子 格子	直線	なし	
長野県松本市	南方古墳		3	0	一枚被せ	金銅	2	鉢	—	—	変則格子	直線	なし	7世紀中 ~後半

金銅板被せ方・銅色：( ) 記載は報告・写真等から判断できず他論文の記載等を引用

繫接統：( ) 記載は鉤金具は欠落しているが立聞孔があるもの

(注25)  
文の中心葉が配され、膨らみをもつが、三葉文の消失後もこの部分のみコブ状に膨らみを残すものが多い。本例は、最下段コブ状の膨らみもなく、直線的に降りる後出的なものとみられる。

**西外1号墳例の位置付け** 銜連結方法の変化およびともづくり化はTK209型式期の中で他の意匠の馬具でみられる変化で、本例もTK209型式期以降の製品とみられる。ただし、他の鐘形鏡板轡・馬具セットではみられない特徴である。また、立聞部分の金具を用いた鉢留手法も本例の特徴であり、鐘形馬具に鉢留立聞を導入する流れの中で、本例が製作された可能性を考えたい。

同じ五突式・斜格子文系の鐘形馬具で、やや特殊な鉢留立聞をする旧南橘村地区例がある。写真から判断すると、その立聞部分には貫通しない五角形の凹部があり、文様板のみ五角形の孔を開け、上から金銅板を被せたようである。文様や鉢数から西外1号墳例と近い時期とみられる。鉤金具を掛ける想定で作られた文様板が、鉢留立聞を新たに取り込む中で想定外に使用されるなどの特殊な状況が予想される。本例もまた、鐘形馬具への鉢留立聞導入期に製作されたイレギュラーな形ではないだろうか。時期としてはTK209型式期の中でも後出的であり、降ってもTK217型式期前半の中で捉えられる。

(肥田)

## (2) 三葉文心葉形鏡板巻・杏葉

三葉文心葉形鏡板巻・杏葉(以下、併せて三葉文心葉形馬具とする)を扱った研究は、河上邦彦、坂靖、鈴木一有、石田大輔、内山敏行、桃崎祐輔などによって行われてきた。<sup>(注27)</sup>とりわけ、三葉文心葉形馬具の編年を体系化したのは鈴木で、①金銅板の被せ方、②鉢数の多寡、③立聞に鉤金具を通して革帯に連結する構造(有鉤系列)から、立聞に直接鉢を打ち付けて革帯に連結する方法(無鉤系列)への変化、④三葉文の退化、を編年の指標として掲げた。

今回はこの編年指標を踏まえつつ、悉皆的に集成した三葉文心葉形馬具を包括する編年案を再検討するとともに、西外古墳群出土例の位置づけを行う。

**金銅板の被せ方・心葉形の形状** TK209型式期の牧野古墳には、金銅板の別被せの鏡板・杏葉(A)と、一枚被せの杏葉(B)が共伴していることで知られる。三葉文心葉形馬具は、TK209型式期後半には一枚被せに収斂すると考えられる。<sup>(注28)</sup>なお、別被せ=三葉文心葉形馬具の古い段階の特徴とすれば、管見の限り西都原古墳群例・伝玉里舟塚古墳例・牧野古墳A例・原分古墳例があるが、心葉形の形状や鉢数などといったデザインに差異があり、複数の系譜の存在が想定できる。鈴木は、原分古墳例を「TK209型式期に定型化する新相の三葉文心葉形杏葉の系譜上に連なるもの」と言及しており、以降、原分古墳例に類するフォルムの心葉形の事例が増加する。

**鉢の多寡** 縁金具に打ち込む鉢数が、密なものから、次第に減少化する。定型化した段階のものは3~4個となる。また、早い段階の資料には、三葉文の中心に鉢が打ち込まれる傾向にあるが、次第に打たれなくなる。

**立聞から繋への接続方法** 鈴木が指摘したように、有鉤系列のものから無鉤系列の変化が考えられる。また、無鉤系列の立聞の形状は、方形のものと半円形のものが確認でき、方形から半円形への変化が想定される。

**三葉文の形態** 西都原古墳群例・吉影D3号墳例・妙蓮寺山古墳例などは、三葉文の中央の葉先が縁金具から分離する。後述するように、日本出土例の前段階となる朝鮮半島出土例も、三葉文の中央の葉先が縁金具から離れていることから、これらの事例は早い段階の資料と想定できる。以降、三葉文の葉先が縁金具と一体化するが、葉先がすぼまるものと、直線状になるものが見受けられる。なお、三葉文心葉形馬具の最終段階に位置づけられるTK217型式期の池田山2号墳例は、三葉文の左右の葉先が下向きの形態を呈する。

**セット関係** 西都原古墳群例・平林古墳例などといった早い段階の資料に十字文楕円形鏡板巻と併存する事例が多い。牧野古墳A例を端緒として、“ともづくり”的なセットが製作され、三葉文心葉形鏡板と杏葉が組み合う事例が数例確認できる。

**朝鮮半島出土例** 三葉文心葉形馬具は、朝鮮半島でも出土が確認できる。朝鮮半島では、新羅圏での出土傾向が高く、百濟圏では伏岩里3-96号墳出土例が唯一の出土例となる。この伏岩里3-96号墳例のみ三葉文の中央の葉先が縁金具と接し、他の朝鮮半島出土例は三葉文の葉先と縁金具が明確に分離する。朝鮮半島出土例はすべて有鉤系列で、縁金具上に波状列点文が施される例がある。朝鮮半島出土例は5世紀中葉~6世紀中葉のもので、日本出土例の前段階の資料

群と位置付けられる。

**段階設定** 以上みてきた三葉文心葉形馬具の編年観を基に、段階の設定を行いたい。

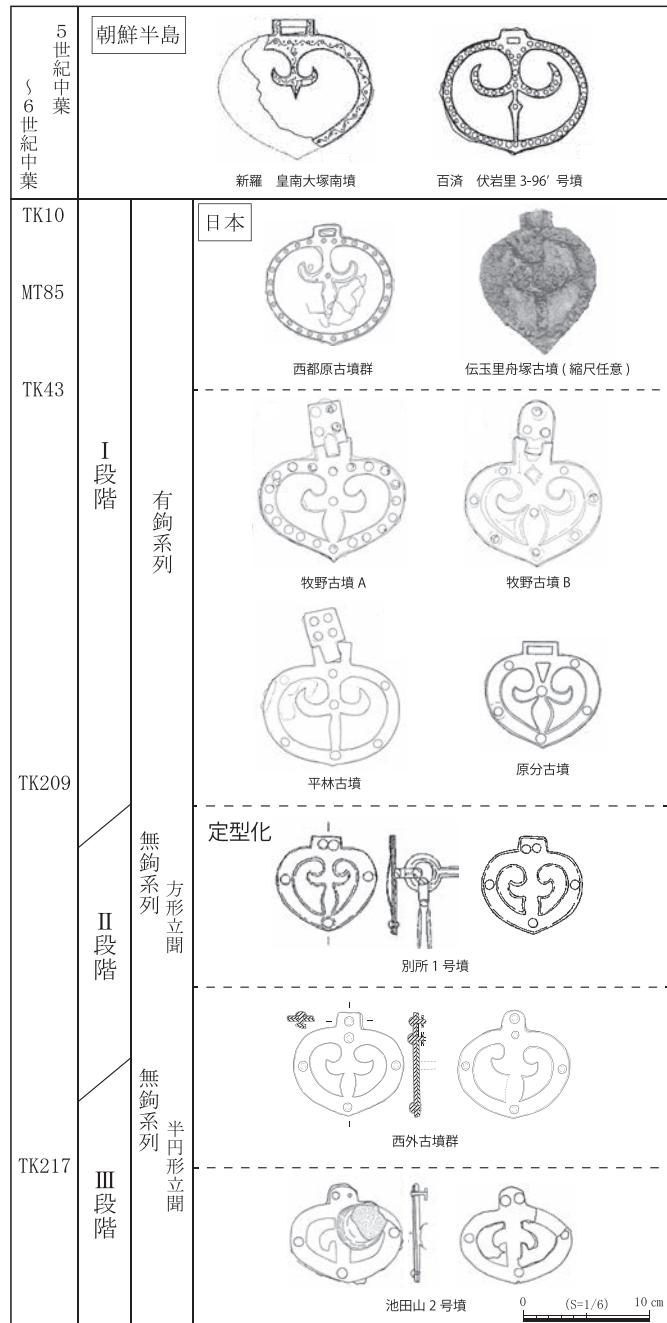
[I段階] この段階は、有鉤系列を特徴とする。別被せ・一枚被せが存在し、別被せが比較的早い段階のものと考えられる。縁金具に打たれる鉢は、II・III段階に比べると多く、資料によりばらつきが大きい。複数の系譜の存在が想定され、資料による個体差が著しい。<sup>(注31)</sup>

[II段階] この段階は、無鉤系列で方形立聞を特徴とする。心葉形の形状・法量が齊一化する。いわゆる定型化する段階と捉えられ、ともづくりの事例が増加する。一枚被せで、縁金具に打たれる鉢数は3～4個に収斂する。

[III段階] この段階は、無鉤系列で半円形立聞を特徴とする。類例が少ないため、一概にはいえないが、II段階と同様、一枚被せで、鉢数は3～4個である。三葉文の退化が認められる。

共伴する遺物からみて、I段階はTK10～TK209型式期前半、II段階はTK209型式期後半、III段階はTK217型式期に相当する。

**西外古墳群出土例の位置付け** 西外古墳群出土例は、鏡板と杏葉のともづくりのセット品で、定型化した段階の資料である。無鉤系列で、鏡板の立聞が方形状であるのに対し、杏葉の立聞が半円形状であるという折衷的な特徴をもつ。II段階・III段階の中間に位置づけられることから、時期はTK209型式期後半～TK217型式期を想定したい。  
(木村)



第11図 三葉文心葉形馬具の編年

(きりい・りき=当調査研究センター調査課調査第1係調査員)

(ひだ・しょうこ=堺市博物館学芸員)

(きむら・ゆうか=奈良県立橿原考古学研究所主任技師)

- 注16 以下、「前稿」は次の文献を指す。桐井理揮・肥田翔子・木村結香「西外古墳群の研究(上)」『京都府埋蔵文化財情報』第137号 公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター 2019
- 注17 京丹後市教育委員会新谷勝行氏の教示による。調査の際は大宮壳神社と府立峰山高校の皆様にお世話になった。記して感謝申し上げる。
- 注18 鉄鎌の部位名称・形態分類は大谷宏治の分類を参照した。大谷宏治「遠江・駿河・伊豆における古墳時代後期の鉄鎌の変遷とその意義」『研究紀要』第10号 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 2003
- 注19 水野編年における後期2～3段階に該当する。水野敏典「鉄鎌」『古墳時代の考古学4 副葬品の型式と編年』同成社 2013
- 注20 渡辺一雄「中田横穴一号における儀装馬具の考察」『中田装飾横穴』いわき市史編纂委員会 1971／河上邦彦・右島和夫「三里古墳の馬具」『平群・三郷古墳』奈良県教育委員会 1977／小野山節「鐘形装飾付馬具とその分布」『武器・馬具と城柵』吉川弘文館 1987／米田文孝「群馬県藤岡市出土馬具考」『文化史論叢 上』創元社 1987／千賀久・鹿野吉則「馬具」『斑鳩藤ノ木古墳第一次調査報告書』斑鳩町 1990／桃崎雄輔「斑鳩藤ノ木古墳出土馬具の再検討—3セットの馬装が語る6世紀末の政争と国際関係—」『考古学講座講演集』(「古代の風」特別号No.2) 市民の古代研究会・関東 2004
- 注21 前掲・注20桃崎論文で、舶載品の甲山古墳例から模倣し、南塚古墳例が国内で生産されたとの論を参照する。
- 注22 古川匠「6世紀における装飾馬具の「国産化」について」『古文化談叢』第57集 九州古文化研究会 2007／古川匠『古墳時代の装飾馬具生産体制』雄山閣 2019
- 注23 桃崎祐輔「風返稻荷山古墳出土馬具の検討」『風返稻荷山古墳』霞ヶ浦町教育委員会 2011／桃崎祐輔「大塚南古墳出土花形鏡板の年代とその歴史的意義」『馬越長火塚古墳群』豊橋市教育委員会 2012
- 注24 前掲・注23と同じ。ともづくり化と鏡板・銜連結部の鍛接、鋤の寡少化が連動するものであることも指摘されている(桃崎2011)。
- 注25 米田分類における「忍冬文形態変化」の項で「壺」「痕跡」としている部分と思われる。
- 注26 その後、7世紀中頃～後半に、斜格子文系が退化した最終形態である下部突起のない南方古墳例(五突式でないが例外的に表に記載)では、単純な鋤留が施される。
- 注27 河上邦彦編『史跡 牧野古墳』広陵町文化財調査報告第一冊 広陵町教育委員会 1987／坂 靖編『平林古墳』(當麻町埋蔵文化財調査報告第3集) 當麻町教育委員会 1994／前掲・注11 鈴木2008／石田大輔「一夜塚古墳出土馬具の検討」『一夜塚古墳出土遺物報告書』朝霞市教育委員会 2011／内山敏行「馬具」『古墳時代の考古学4 副葬品の型式と編年』同成社 2013／桃崎祐輔「馬具からみた九州の地域間交流—舶載馬具と国産規格品馬具に着目して—」『古墳時代の地域間交流2』第17回九州前方後円墳研究会大分実行委員会 2014
- 注28 前掲・注11 鈴木2008
- 注29 桃崎祐輔「筑内37号横穴墓出土馬具から復元される馬装について」『研究紀要2001』福島県文化財センター白川館 2002
- 注30 諫早直人『東アジアにおける騎馬文化の考古学的研究』雄山閣2012
- 注31 なお、このⅠ段階に相当する時期について、鈴木は「三葉文心葉形杏葉は、後期前半(MT15型式期)からみられるが、後期後半(TK209型式期)以降に盛行する形態との差異が大きい。」と述べており、おそらく前者には西都原古墳群例や伝玉里舟塚古墳例などが、後者には牧野古墳例や原分古墳例などが該当すると思われる。心葉形の形状・鋤の多寡に明確な差異があるため、それぞれに段階を設けるべきかと思案したが、鋤の密度が西都原古墳群例に似るMT85型式期の一夜塚古墳例が一枚被せであることなどから、現時点では、Ⅰ段階において特徴ごとで区分することが困難と判断し、今回は一段階としてまとめた。初期の三葉文心葉形馬具の系統分類について、今後の課題としたい。

## 外来系土器にみる初期古墳の成立基盤

—城陽市芝ヶ原古墳築造の背景—

高野陽子

### 1. 河川交通への視点

山城南部地域を貫流する木津川は、古来、淀川から瀬戸内海へ通じる内陸の水上交通路としての機能を果たしてきた。三重・滋賀・奈良県の3県に跨る山系に源を発する木津川は、山城盆地（巨椋池以南）南部の木津川市・京田辺市、盆地中央の城陽市・八幡市域を経て、淀川に合流するまで、流域には近世に至るまで多くの川津が形成されていた。古代の川津には、木津川中流域の拠点であり平城京への物資の荷揚げ港となった「泉津」があり、上津遺跡などの調査でその一端が明らかになっている。また、記紀には仁徳天皇の皇后磐之媛が大阪湾から木津川を遡上した記述があり、大阪湾沿岸地域と山城・大和を結ぶ木津川の河川交通路としての機能が知られるところである。

弥生時代から古墳時代の木津川の川津の状況は長らく不明であったが、近年の発掘調査によって、現在の木津川と近接する城陽市下水主遺跡で、木津川と繋がる大規模な流路が検出され、はじめてその実態が明らかとなった。<sup>(注1)</sup> 下水主遺跡では古墳時代初頭の、多量の外来系土器が出土しており、下流域に位置する佐山遺跡・内里八丁遺跡とともに山城南部地域における地域間交流の中心地域であったことが判明している。下水主遺跡の立地する城陽市域は古代に「栗隈」と呼ばれた地域であり、庄内期後葉から布留期前葉にかけて芝ヶ原古墳や長塚古墳、上大谷6号墳、西山古墳1・2号墳など継続して初期古墳が築造されており、古墳出現期における山城南部地域の地域勢力の拠点となっている。小稿では、外来系土器の出土状況から、古墳出現期の木津川下流域の地域間関係みることによって、山城南部地域における芝ヶ原古墳を中心とする初期古墳築造の背景を検討したい。

### 2. 木津川下流域における土器搬入拠点

山城地域における古墳時代初頭の土器交流は、盆地中央の巨大な遊水池巨椋池周辺の低地部に集中してみられ、多くの搬入拠点が形成されている。木津川下流域右岸には久御山町佐山遺跡、左岸には八幡市内里八丁遺跡が立地し、さらに桂川下流域では、京都市水垂遺跡・長岡京市雲宮遺跡、向日市鴨田遺跡などの集落が形成される。これらの搬入拠点が形成された背景には、古墳時代初頭にあらたに低湿地開発が行われたこと、古墳時代初頭に列島的な規模で遠隔地との地域

間交流が進み、河川交通の  
重要性が増したことによる  
とみられる。

近年、初期古墳が集中する城陽市域では、あらたな資料として木津川の沿岸に位置する下水主遺跡の実態が明らかになっている(第1図)。下水主遺跡では、弥生時代中期後葉～末の氾濫流路の片岸の基底に、丸太材を敷き並べ、上層に盛土をした大規模な護岸構築をもつ流路を検出し、さらに護岸の一部にシルトと砂層の互層に粗朶を用いて強化した盛土層からなる張り出しをもつことが明らかとなっ

た。こうした大規模な護岸遺構は近畿地方においても検出例がなく、流路の堆積状況から木津川と接続していたとみられることから、弥生時代中期における木津川の河川交通の拠点となる川港として機能していたと考えられる。さらに、古墳時代初頭においてこの流路はあらたに再掘削され、準構造船を曳航することも可能な幅10m以上の水路として機能し、多量の外来系土器を含む交流拠点となっていたことが判明した。水路の掘削は、庄内期前葉に遡り、庄内期を通じて継続的に浚渫を繰り返して使用されたのち、布留期前葉に至って徐々に埋没し終息している。

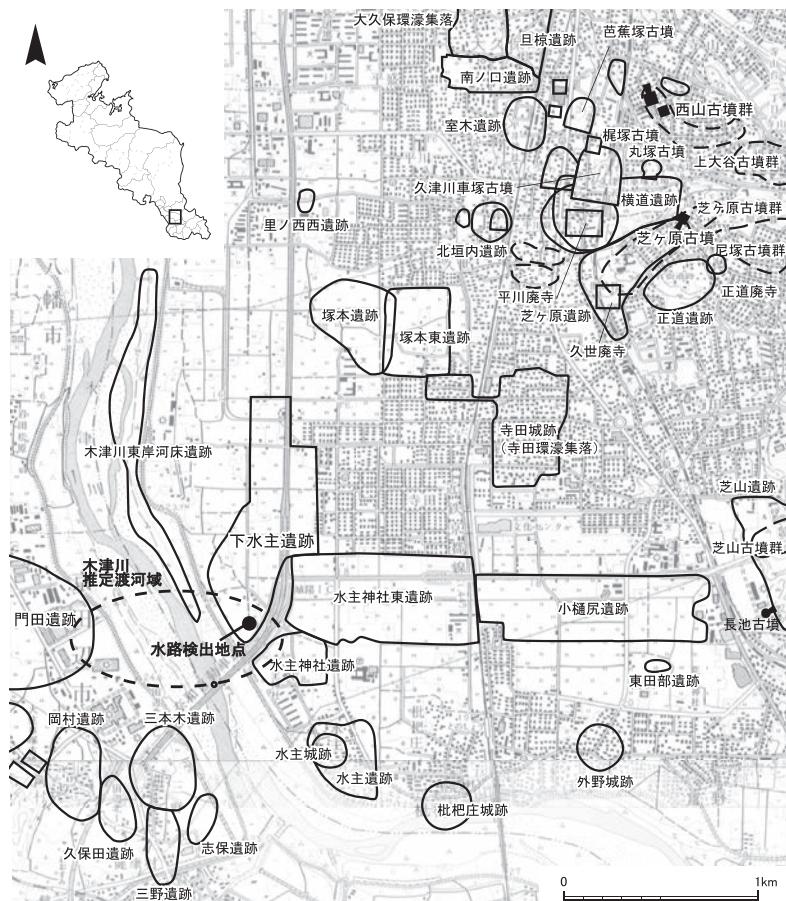
新たな資料となった下水主遺跡の外来系土器の出土状況は、従来から知られていた流域のさらに下流側となる巨椋池周縁地域と異なる様相がみられる。以下には、木津川下流域の外来系土器の出土状況について段階的に検証する。

### 3. 木津川下流域の土器搬入状況

外来系土器の時期については、佐山遺跡編年に基づいて段階を示す。<sup>(注2)</sup> 1期を弥生時代後期後葉(佐山I-2・3期)、2期を弥生時代後期末～庄内期前葉(佐山I-4～佐山II-1期)、3期を庄内期中葉(佐山II-2期)、4期を庄内期後葉(佐山II-3・4期)、5期を布留期前葉(佐山III-A-1期)とする。

## 1期 弥生時代後期後葉

河内(生駒西麓)産の土器や、胎土・型式から判断される野洲川流域からの搬入とみられる近江



第1図 城陽市域の古墳と集落

南部系土器が外来系土器の中心であることは、弥生時代中期から後期を通じてみられる傾向と同様であるが、注目されるのはこの時期にはじめて東海系土器が出土することである。

巨椋池南部の久御山町佐山遺跡や同佐山尼垣外遺跡では、周辺地域からの搬入となる河内産大形壺や近江南部系甕の出土にとどまるが、上流側の城陽地域では、城陽市下水主遺跡の後期後葉の住居から河内産大形壺、近江南部系土器に加えて、新たに東海系器台の搬入品が出土しているほか、高杯の装飾手法等にも東海系土器の影響が現れるなど、東海地域との強い関係性がうかがえるようになる。

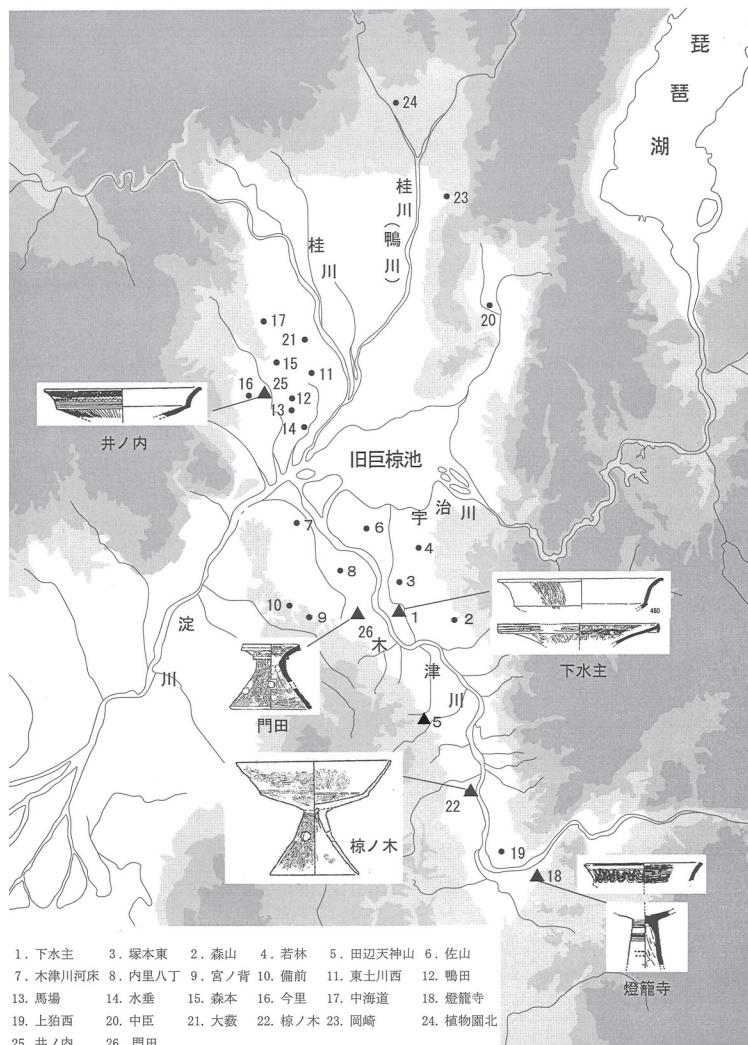
## 2期 弥生時代後期末～庄内期前葉

東海系土器の影響が流域に広がる段階である。巨椋池南部では、佐山遺跡などで東海系小形器台が出土しているほか、あらたに木津川沿岸に成立した八幡市内里八丁遺跡でも、高杯・器台などに北近江・東海系土器の影響がみられるようになる。城陽地域では、前段階と同様に東海系土器の影響が引き続きみられ、対岸の大住に所在する京田辺市門田遺跡においても、近畿中央部でも例がない山中式最終段階の搬入品である屈曲部に突帯をもつ東海系小形器台が出土している。

## 3期 庄内期中葉

遠隔地間の土器交流が各地ではじまる時期である。木津川下流域では、河内・大和・近江などの周辺地域からの搬入土器のほか、前段階の東海系土器に加え、北近畿系、北陸系、吉備系土器が出土している。

巨椋池周縁では、この段階に日本海沿岸地域からの搬入が増加し、左岸の内里八丁遺跡で北近畿系土器、右岸の佐山遺跡では北陸系土器が顕著にみられる。一方、上流側の城陽地域では、東海系土器に加えて、下水主遺跡で才ノ町式の吉備系土器が出土しているほか、あらたに内陸側に成立した城陽市塚本東遺跡においては、溝内から多量の北近畿系土器が出土している。これらの土器は在地の胎土をなしており、近畿北部からの実際の人の移動を伴い製作されたものと考えら



第2図 山城の古墳出現期集落と東海系土器の出土地点

付表 古墳出現期における山城南部の外来系土器

遺跡名	所在地	河内	大和	近江南	東海	阿波	讃岐	吉備	山陰	北近畿	北陸	西部瀬	南関東
木津川中流域	岡田国遺跡	木津川市		●			●	●		●			
	砂原山墳丘墓	木津川市								○			
	椿井大塚山古墳	木津川市	※	●			●		●				
	椋ノ木遺跡	木津川市		○	○	○							
	大切遺跡	京田辺市	●	●	●		●		●				
	田辺天神山遺跡	京田辺市			○	○							
	興戸遺跡	京田辺市				○							
木津川下流域	門田遺跡	京田辺市				○							
	下水主遺跡	城陽市	○	●		■●○■●	●	●	■	●	■		
	塚本東遺跡	城陽市	※	■		■		■		■			
	芝ヶ原古墳	城陽市				●							
	長池古墳	城陽市				●							
	西山1・2号墳	城陽市	●										
	佐山遺跡	久御山町	●	●	■●	■●	●	●	●	●	■	●	
	佐山尼垣内遺跡	久御山町	○										
	備前遺跡	八幡市									○		
	内里八丁遺跡	八幡市	●	●	●	■●	●	●	●	●	■	■	●
	木津川河床遺跡	八幡市	●			●	●	●	●	●	●		

&lt;凡例： ○ 弥生後期後葉～庄内期前葉（1・2期） ■庄内期中葉（3期） ●庄内期後葉～布留期前葉（4・5期）※は報文による&gt;

れる。また、同遺跡の出土資料で、胎土・手法から大和東南部からの搬入とみられる大和産の庄内形甕が出土していることはとくに注目される。庄内期前半に大和産の庄内形甕が搬出される事例は近畿中央部でもきわめて少なく、大和東南部に成立した初期ヤマト政権との地域間関係をみるとうえで重要な資料である。

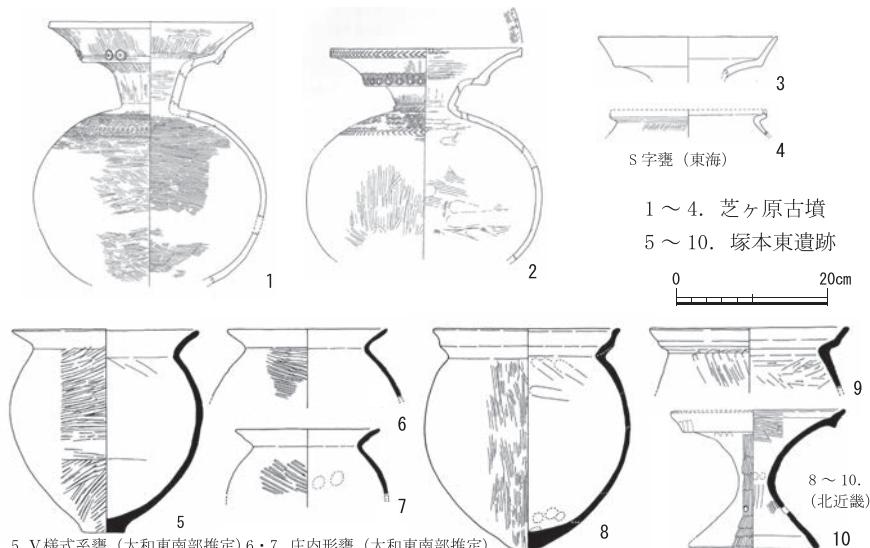
#### 4期 庄内期後葉～布留期初葉

土器の地域間移動が列島規模で最も盛行する時期である。この段階には、河内・大和からの近畿周辺地域からの搬入に加えて、あらたに東部瀬戸内の讃岐系、阿波系土器が加わり、さらに山陰系土器は顕著な出土傾向をみせるようになる。また、東海系土器のほかに南関東系土器や西部瀬戸内系土器など従来確認されなかったさらに遠隔地の土器が含まれるが、一方で北近畿系土器は前段階と対象的に低調なものとなる。

巨椋池南部の佐山遺跡では、讃岐系・阿波系に加え、吉備系、さらに遠隔地の周防周辺とみられる西部瀬戸内系土器が出土している。東部瀬戸内系土器は内里八丁遺跡でも確認されるが、ここでは東国の南関東系土器があわせて出土しており、近畿中央部のなかでも数少ない事例として重要である。城陽地域では、下水主遺跡で讃岐系・阿波系・吉備系土器が出土しているほか、前段階と引き続き東海地域からの影響がみられる。この時期にはS字甕の搬入や東海系のなかでも底部手法から伊勢系と判断される資料が確認される。S字甕は芝ヶ原古墳でも出土しており、芝ヶ原古墳<sup>(注3)</sup>・長池古墳<sup>(注4)</sup>の二重口縁壺にみる加飾手法とともに墳墓出土土器を含めて城陽市域の初期古墳には東海系土器の影響が色濃くみられる。

### 5期 布留期前葉

土器の地域間移動が低調となり、山陰系土器を取り込む布留式土器が組成の主体をなす段階である。この時期には、河内(生駒西麓)産庄内形甕の搬入はなお一定量確認されるが、弥生時代から系統的にみられた近江



第3図 古墳時代初頭の城陽地域出土土器

南部系土器はほぼ終息し、東海系土器の影響も低調なものとなる。

巨椋池南部の佐山遺跡、内里八丁遺跡や、城陽地域の下水主遺跡でも河内産庄内形甕が出土している。遠隔地からの搬入土器では、北陸などの日本海東部域の土器が終息し、布留式を構成する山陰系土器が主体を占めるようになる。また、讃岐系・阿波系土器は継続して確認され、流域では淀川・大阪湾沿岸地域を介した瀬戸内地域との関係性が明瞭なものとなる。

### 4. 「栗隈」にみる地域間関係

城陽地域における搬入土器の状況をみると、下水主遺跡では弥生時代後期後葉にすでに東海系土器の搬入が認められ、東海地域との地域交流が弥生時代後期後葉段階にすでに密接に行われていたと推定される。この状況は下水主遺跡の対岸においても同様であり、前節で述べたように、左岸の京田辺市門田遺跡では、近畿中枢地域でも例をみない受部と脚部の屈曲部に突帯をもつ東海の山中式の系統にある小形器台が出土し、木津川の両岸で東海系土器が出土することから、弥生時代後期後葉から古墳時代初頭において木津川を渡河する川港として機能していたと推定される。山城から宇治田原を経て東国へ、近江を介して北陸へ、さらに西国へは生駒・八幡地域を介して北河内・摂津、瀬戸内沿岸地域へ繋がる要地であり、列島規模で東西交通路を最短で結ぶ木津川流域最大の渡河地となり、川津として機能したものであろう。

椿井大塚山古墳出現を前後する時期の山城地域の地域関係は、前述した木津川流域における外来系の土器の出土状況だけでなく、墳墓の動態においても再検討を必要とする段階にある。城陽市域の出現期古墳の動態は、庄内期後半に初期前方後方墳である芝ヶ原古墳(全長20m)が出現し、き鳳鏡が出土した上大谷6号墳(一辺15m方墳)などがこれに続くとみられるがその規模は小さく、後裔となる古墳の築造状況については不明であった。しかしながら、昨年度、1961年に緊急調査された西山古墳群の出土遺物(同志社大学蔵)の再整理がなされ、これまで古墳時代前期後半とされてきた西山1号墳(全長80m)<sup>(注5)</sup>の時期が修正され、古墳時代前期前葉の集成編年2期である

ことが明らかにされている。西山1号墳出土土器は再整理で桐井理揮が指摘するように、佐山ⅢA-1式段階に位置づけられるものであり、およそ布留1式<sup>(注6)</sup>に併行するものである。そのなかでも1号墳出土二重口縁壺は口縁端面を外面側に拡張させる布留1段階にみられる手法が確認できる一方、加飾性を残す小形化した加飾二重口縁壺が共伴することから、布留1式でも古相を示す資料とみられる。また、2号墳の盗掘坑からは河内(生駒西麓)産の庄内形甕が出土しているが、土器の編年観もまた副葬された奈良県黒塚古墳と同范の三角縁四神四獸鏡の年代観と近年の研究状況を照らせば、整合性がある。椿井大塚山古墳が出現する山城にあって、従来から知られてきた向日丘陵の盟主墳である桂川水系の元稻荷古墳のほかに、同時期に木津川流域に向日丘陵と同規模の前方後方墳が成立していたことが明らかにされたものである。1号墳に続く方墳である2号墳にみる布留1式期の黒塚古墳と同范関係にある三角縁神獸鏡の副葬は、「栗隈」<sup>(注7)</sup>の地域勢力と東方地域との地域間関係が大きく変化し、木津川流域に成立した初期ヤマト政権中枢にある椿井大塚山古墳の被葬者の勢力下におかれたことを示すものとみられる。

以上、述べてきたように、東海以東の勢力が瀬戸内海沿岸地域や北部九州と大和を介さずに交渉を求めるとき、「栗隈」の下水主遺跡が立地する水主地区は水陸路の要地として、きわめて重要な地点であったと考えられる。城陽地域に東海地域との関係性が強くみられる芝ヶ原古墳が成立する背景には、その被葬者が東海以東の東国地域と瀬戸内海航路を結ぶ列島規模での基幹水陸交通路の要となる交流拠点を抑えたことによるものであろう。弥生時代後期以来の東海地域との深い関係性は、大和盆地を経ずに瀬戸内海航路へ最短で繋がるルートを確保しようとする東海勢力の欲求によるものであり、そのもとに在地勢力の伸張があったと考えられる。芝ヶ原古墳が出現する庄内期後半には、3節で示したように、この重要な交通拠点の周辺に立地する塚本東遺跡で大和東南部からの搬入土器が北近畿系土器とともに出土しており、在地勢力と東海、大和と北近畿勢力の「栗隈」の地における緊張関係が土器様相からも看守される。こうした地域間関係は古墳時代前期前葉の巨大前項後円墳の椿井大塚山古墳の成立とともに大きく転換する。

(たかの・ようこ=当調査研究センター調査課調査第2係長)

- 注1 高野陽子・筒井崇史・福山博章ほか「新名神高速道路整備事業関係遺跡 下水主遺跡第1・4・6次」『京都府埋蔵文化財調査報告集』第173冊 公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター 2018
- 注2 高野陽子「弥生時代後期～古墳時代の土器様相」『京都府遺跡調査報告書』第33冊 佐山遺跡 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター 2003
- 注3 長友朋子「芝ヶ原古墳出土土器の位置づけ」『芝ヶ原古墳発掘調査・整備報告書』(城陽市埋蔵文化財調査報告書 第68集) 城陽市教育委員会 2014、小泉裕司・岸本直文ほか『芝ヶ原古墳発掘調査・整備報告書』(城陽市埋蔵文化財調査報告書 第68集) 城陽市教育委員会 2014
- 注4 小池 寛「京都府南山城地域における古墳出現期の一様相」『京都府埋蔵文化財情報』第124号 公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター 2014
- 注5 小泉裕司ほか「西山古墳群」『城陽市史』第3巻 城陽市史編さん委員会 1999
- 注6 桐井理揮ほか「西山1・2号墳出土遺物の再検討」『同志社大学歴史資料館館報』第23号 同志社大学歴史資料館 2020
- 注7 寺沢 薫「畿内古式土師器の編年と二・三の問題」『矢部遺跡』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第49冊 檜原考古学研究所 1986

## 近世土師質小壺「つぼつぼ」の検討

加藤 雄太

### 1. はじめに

近世京都の発掘調査では多様な遺物が出土するが、その中には小型の壺形の土師質製品がある。通称「つぼつぼ」と称される、この土師質の小壺は京都とその周縁である畿内などの発掘調査で一定量の出土が確認されるものの、考古学的な検討があまりされてこなかった感がある。そのため、今回は資料数の限られた検討となるが、この「つぼつぼ」を考えてみる。

### 2. 概要と研究

「つぼつぼ」とは、日本の土人形の初源で、最古の歴史をもつとされる伏見人形の興りの時期に造られ始めたとされる(北原2019)。手びねりで直径3~4cmくらいの壺形で彩色がない素焼きの土器である「つぼつぼ」は、伏見稻荷大社の主神宇迦御靈大神が五穀豊穣を司ることから稻荷山の土を持ち帰り、田畠へ埋めれば作物がよく育つという庶民信仰があり、参詣の土産物につながった(田中2019)。

「つぼつぼ」に関しては川崎巨泉や広田長三郎が、江戸時代に書き残された史料からその存在について検討している。川崎は『おもちゃ画譜』において直径一寸くらいの壺形の素焼を「つぼつぼ」と称すること、また、別呼称に「ヘソデンボ」、「ヘソカラケ」があること、轆轤を用いず、手びねりで形成することを指摘している(川崎1979)。

また、広田長三郎は「つぼつぼ」が一般大衆に普及したのは吉祥と結びついていたからではないかと指摘している。新築のお祓いお清めや、家運隆盛祈願、茶道のお清めお祝いの意味があったというのである。広田は茶道千家の第三世千宗旦(天正6(1578)年~万治元(1658)年)が稻荷神への信仰が篤く、初午に「つぼつぼ」を求めて帰り、「つぼつぼ」のデザインを3つ組み合わせて三千家の替紋にしたとされる説と、表千家六世覚々斎原叟(延宝6(1678)年~享保15(1730)年)が祝席で膳にそえられた「つぼつぼ」のなます入れをみて替紋にしたという説の二つを紹介している。また新築した茶室に初めて客を招き催す茶会のことを「初招き(ハツウマネキ)」といい、これが「初午(ハツウマ)」と結びつき、初午に売られた「つぼつぼ」と結びついたとする説も提



写真1 「つぼつぼ」(左:SK42・右:SK2098)

示している(広田 1998)。

文献資料の「つぼつぼ」初出は山科言経の残した『言経卿記』の天正10年2月5日の記録である。「稻荷社へ初午日之間參詣了 路次ニツホツホ、土器スリコハチ(中略)阿茶ニミヤケニツホツホ以下遣了」。初午より稻荷社に参詣し、つぼつぼと土器のすり小鉢を入手したこと、当時五歳の息子言緒(阿茶)に土産としておくったことがわかる。この「ツホツホ」が今回取り扱う「つぼつぼ」で、天正年間から稻荷で売られており、どうやら稻荷社の近くで入手する土産物であったらしい。

藤森寛志は、このような文献上の「つぼつぼ」の取り上げられた事例を「関西近世考古学研究16 土人形が見た近世社会」で集成している。そこでは土人形の報告を中心であるが、「つぼつぼ」に関しても言及されており参考となる。天正10(1582)年の『言経卿記』の記録に始まり、安永7(1780)年の『都名所図会』でも見世棚に「つぼつぼ」が描かれていることが確認できる。また、藤森は1842年の『愚雑組』にも記載があるとしているが、『愚雑組』では「家毎に土を丸ろめて粒にして見世に出してうる。これを粒々(つぼつぼ)と云」と紹介しているように、本論では取り上げる小型壺の「つぼつぼ」ではなく土を丸めてつくる「つぶつぶ」と称される資料を指していると考えられ、「つぼつぼ」と「つぶつぶ」が混同されている可能性がある。

また、「中を空に孟の様にせしを田豊と云。」とある。田豊(でんぽ)は「つぼつぼ」とは別の器種で土師質の小鉢である。『愚雑組』によれば土で丸めた「つぼつぼ」は、孟の様にして「でんぼ」になるという。こうした情報は、『愚雑組』の記された時代において「つぼつぼ」と「つぶつぶ」が混同された、もしくは「つぼつぼ」が忘れられていた可能性を示している。

このように藤森氏の成果から天正10(1582)年には「つぼつぼ」が存在し、『都名所図会』の作成された安永9(1780)年までは巷に出回っていたことが指摘できるだろう。

### 3. 出土「つぼつぼ」の検討

こうした「つぼつぼ」が時期を経る毎に変化するかどうかを検討する。今回の検討の対象とする資料は、当調査研究センターと同志社大学が調査した以下の遺構資料に限る。これは本論作成の期間の都合により制限されたもので、今後は近世京都のその他の調査資料でも検討されるべきであろう。以下に挙げるのは今回の基準とした遺構資料である。「つぼつぼ」の前後関係に注視しているが、年代に関しては共伴する土師器皿などの年代を参考にした。

#### (1)内膳町(京都府1980)SK04

土師器皿や信楽の擂鉢、国産や中国産の陶磁器が出土した。16世紀末。

#### (2)平安京一条二坊十四町(左獄・囚獄司)(京都府埋文センター1995)

土坑8 大型の方形土坑で、土師器皿、焼塩壺、ほうらく、国産陶器が出土している。17世紀前半。

土坑42 南北6m、東西4mの方形で、土師器皿や焼塩壺、ほうらく、国産陶器、中国産磁器、などが出土している。17世紀前半。

(3)地下鉄烏丸線今出川駅(同志社大学1981)SK104

土師器皿や擂鉢、瀬戸美濃や肥前の陶器が出土している。17世紀半ば～後半。

(4)新島会館(同志社大学1990)NWK128

宝永5(1708)年の宝永の大火灾以前は寺域が広がっていた。肥前磁器や京焼が出土している。

17世紀末～18世紀初頭。

(5)烏丸キャンパス地点(同志社大学歴史資料館2013)落込み1334

土師器皿が集中的に投棄され、焼塙壺や擂鉢、京焼、肥前磁器が出土した。18世紀初頭～前半。

(6)常盤井殿町遺跡 摂家二條家の屋敷地にあたる。

SK2098 焼土を含む廃棄土坑で、天明8(1788)年の天明の大火灾で罹災した。土師器皿をはじめ、肥前磁器、京・信楽系陶器が出土している(同志社大学歴史資料館2010)。18世紀後半。

SK2a2092 肥前磁器を中心とした国産陶磁器が出土している。18世紀後半～末。

SK3a20102 肥前磁器や19世紀の瀬戸美濃、芥子面子が出土している(同志社大学歴史資料館2018)。18世紀後半～末。

#### 4. 分類

今回の検討では体部の形状からIからIVに分類し、I、III、IVはそれぞれAとBに細分した。もっとも、個体差の著しい遺物であるため、今後慎重に検討される必要がある。

I A 口縁は端部に丁寧なナデ調整が施される。体部は規則的なユビオサエが入り、腰部から内湾しながら口縁にかけてすぼまる。また、腰部は広がり、器壁が薄い。底部は指で押して平らに成形している。

I B 口縁は端部に丁寧なナデ調整が施される。体部はランダムなユビオサエが施され、調整の単位が捉えにくい。腰部で内湾し、口縁はすぼまり、器壁はIAよりも均一である。底部は指で押して平らに成形している。

II 口縁は端部に簡易なナデ調整が施される。体部はランダムなユビオサエが施され、調整の単位が捉えにくい。腰部から口縁にかけて上方に立ち上がり、口縁端部はそのまま上方にぬける。また、器壁は比較的均一の厚さである。底部は丸底である。

III A 口縁は端部に簡易なナデ調整が施される。端部はつまみあげるように上方ないし外反するようにのびる。体部は右から左斜め上方に規則的なユビオサエが施される。腰部が膨らむように内湾している。また、器壁はやや不均一で、腰部から下のユビオサエ調整が粗い。底部は丸底と平底の両方が確認できる。

III B 口縁の端部はつまみ上げるように上方ないし外反するようにのび、III Aよりも断面形が丸くなる。体部は右から左斜め上方に規則的なユビオサエが施される。腰部は膨らむように内湾している。また、器壁は不均一で、腰部から下のユビオサエ調整が粗く明瞭に観察できる。底部



図1 「つぼつぼ」の形態変化

は丸底と平底の両方が確認できる。III BはIII Aよりも口径が広くなる。

IVA 口縁の端部は内側にすぼまるように立ち上がる。体部は右から左斜め上方に規則的なユビオサエが施される。体部の中ほどで内湾し、最大径は体部の中ほどで、器高が低くなる。また、器壁はやや均一化される。底部は丸底や平底の両方が確認できる。

IVB 口縁の端部は上方にぬけるように立ち上がる。体部は右から左斜め上方に規則的なユビオサエが施される。体部は内湾し、IVAと比較して腰が下がる印象を受ける。さらに器高が低くなる。また、これまで腰部を境に分かれていた調整の別が観察できない。底部は平底で、一部資料につよく指で押された痕跡が確認できる。

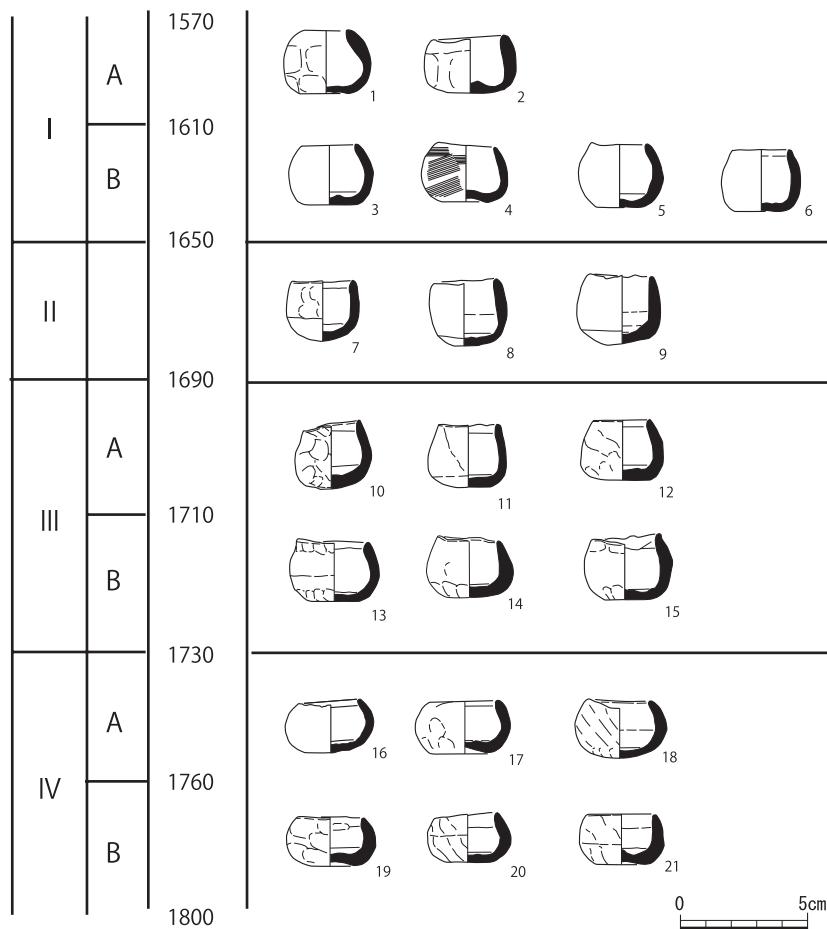
## 5. 前後関係の設定

分類案で着目したいのは腰部から口縁にかけての立ち上がり方である。Iは腰部から内湾しながら上部にかけてすぼまる。IIは腰部から口縁にかけて上方に立ち上がり、口縁端部はそのまま

上方にぬける。Ⅲは腰部が膨らむように内湾し、端部がつまみあがるように上方ないし外反する。Ⅳは体部の中ほどで内湾し、最大径は体部の中ほどで、器高が低くなり、器壁が厚い。

こうした器形の変化は時間による変化と想定され、「つぼつぼ」も作成された当初から調整や形状に簡略化が進んでいくと考えられる。

そのなかで共伴の土師器皿などからⅠAが今回掲載する資料の中でもっとも古い型式であると仮定した。ⅠBはⅠAよりも口縁が厚くなり調整に簡略化が見出せ



1・2 内膳町 SK04 3・5・6：平安京左京一条 SK42 4：平安京左京一条 SK08  
7～9：今出川駅 SK104 10～12：新島会館 SK128 13～18：烏丸キャンパス SK1334  
19：常盤井殿町遺跡 SK2098 20～21：常盤井殿町遺跡 SK3a20102

図2 「つぼつぼ」編年案

る。ⅡはⅠBの特徴を引き継ぎながらも体部が上方に立ちあがるように変わる。丸底になるのも特徴である。ⅢAはふたたび体部が内湾し、口縁の端部はつまみあげるように上方ないし外反する。ⅢBではⅢAの特徴を有しつつも口径が広くなり、口縁端部の肥厚化が特徴である。ⅣAはⅢBから器高が低くなり、体部の中ほどで内湾する。ⅣBはⅣAの口縁端部が内側にすぼまるよう立ち上がるのに対して、口縁の端部は上方にぬけるように立ち上がる特徴があり、さらに器高が低くなり、底部が平坦になる。

## 6. 年代比定について

常盤井殿町遺跡SK2098は天明の大火後の整地にともない廃棄された土坑であることから、SK2098出土のⅣBには18世紀後半の年代が与えられる。そのほか共伴遺物の年代から各種「つぼつぼ」の年代を想定した。ⅠAは16世紀末から17世紀初頭、ⅠBは17世紀前半から半ば、Ⅱは17世紀後半、ⅢAは17世紀末から18世紀初頭、ⅢBは18世紀前半、ⅣAは18世紀半ばにあたるのではないか。そしてⅠAの年代は『言経卿記』と、ⅣBの年代は『都名所図会』とおおよそ合う。

## 7. おわりに

今回は「つぼつぼ」を今後考えていくための簡素な検討に終始した。また、「つぼつぼ」は京都では広範に出土することから今回提示した遺構の他にも検討に加えるべき資料があるので、今後はそれらの資料も加えて、年代や型式の変化に対応した研究を進めていく必要があるだろう。

(かとう・ゆうた=当調査研究センター調査課調査員)

### 参考文献

- 北原直喜 2019 「伏見人形」一般社団法人日本人形玩具学会『日本人形玩具大辞典』東京堂出版  
p.334-335
- 田中正流 2019 「つぼつぼ」一般社団法人日本人形玩具学会『日本人形玩具大辞典』東京堂出版  
p.222
- 川崎巨泉 1979 『おもちゃ画譜』村田書店
- 広田長三郎 1998 「つぼつぼ考」『郷玩文化』No.129 郷土玩具文化研究会
- 東大史料編纂所編 1959 『大日本古記録 言経卿記』一 岩波書店
- 藤森寛志 2008 「土人形の歴史と民俗～伏見人形を中心として～」『関西近世考古学研究会 第20回大会 土人形が見た近世社会』関西近世考古学研究会
- 京都府教育委員会 1980 『埋蔵文化財発掘調査概報(1980-3)』
- (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1995 『京都府遺跡調査概報』第63冊
- 同志社大学校地学術調査委員会 1981 『同志社構内地下鉄烏丸線今出川駅地点の発掘調査』
- 同志社大学歴史資料館・(公財)京都市埋蔵文化財研究所 2013 『相国寺旧境内・上京遺跡発掘調査報告書 同志社大学烏丸キャンパス建設に伴う発掘調査』(同志社大学歴史資料館調査研究報告第12集)
- 同志社大学歴史資料館 2010 『常盤井殿町遺跡発掘調査報告書—近世二條家邸を中心とする調査成果一』(同志社大学歴史資料館調査研究報告第8集)
- 同志社大学校地学術調査委員会 1990 『同志社大学徳照館地点・新島会館地点の発掘調査』(同志社大学地学術調査委員会調査資料 No.22)
- 同志社大学歴史資料館 2018 『常盤井殿町遺跡・公家町遺跡・相国寺旧境内発掘調査報告書』(同志社大学歴史資料館調査研究報告第15集)
- 平尾政幸 2019 「土師器再考」『洛史』(研究紀要第12号) 京都市埋蔵文化財研究所

## 令和2年度発掘調査略報

## 1. 金生寺遺跡第5・7次(F地区)

**所 在 地** 亀岡市曾我部町法貴

**調査期間** 令和2年1月6日～令和2年10月29日

**調査面積** 1,813m<sup>2</sup>

はじめに 金生寺遺跡は、亀岡市の南西部の扇状地上に位置する、古代から中世の集落跡である。遺跡に隣接するように近世の摂丹街道が走っており、周辺には50基以上の古墳が密集する法貴古墳群や、中世の方形居館が調査された犬飼遺跡等が分布している。今回の発掘調査は、令和元年度から令和2年度にかけて、国営緊急農地再編整備事業に伴って実施した。

**調査概要** 今回の調査では、奈良時代と古墳時代の遺構・遺物を確認した。

上層では、畦畔 S X26や溝 S D31等を検出した。S X26は幅約1m、高さ約0.2mで、東西方向に総延長約50mにわたって検出した。畦畔に伴う耕作土層からは奈良時代後半の遺物が出土しており、S X26が最初に築造された時期を示すものと考える。また、周辺で検出した溝からは墨書き土器数点のほか木簡が出土した。木簡は一部欠損するが、「田養カ丁」と読める。

下層では古墳時代の遺構を検出した。調査区の大半を占める自然流路N R25は法貴谷川の旧流路と考えられる自然流路であり、蛇行しながら東流する。最大幅約15m、深さ約1.5mを測る。N R25の内部では、水利施設S W45、下流部分では盛土を伴う水利施設S W41と堤S X02を検出した。S W41は、径60cmを超す大木の上面に盛土を施することで構築された堤状の遺構である。S W45とS W41の間の部分はラミナ状の堆積は認められず、貯水池等の機能を想定しうる。S X02



第1図 調査地位置図(国土地理院 1/25,000 法貴)

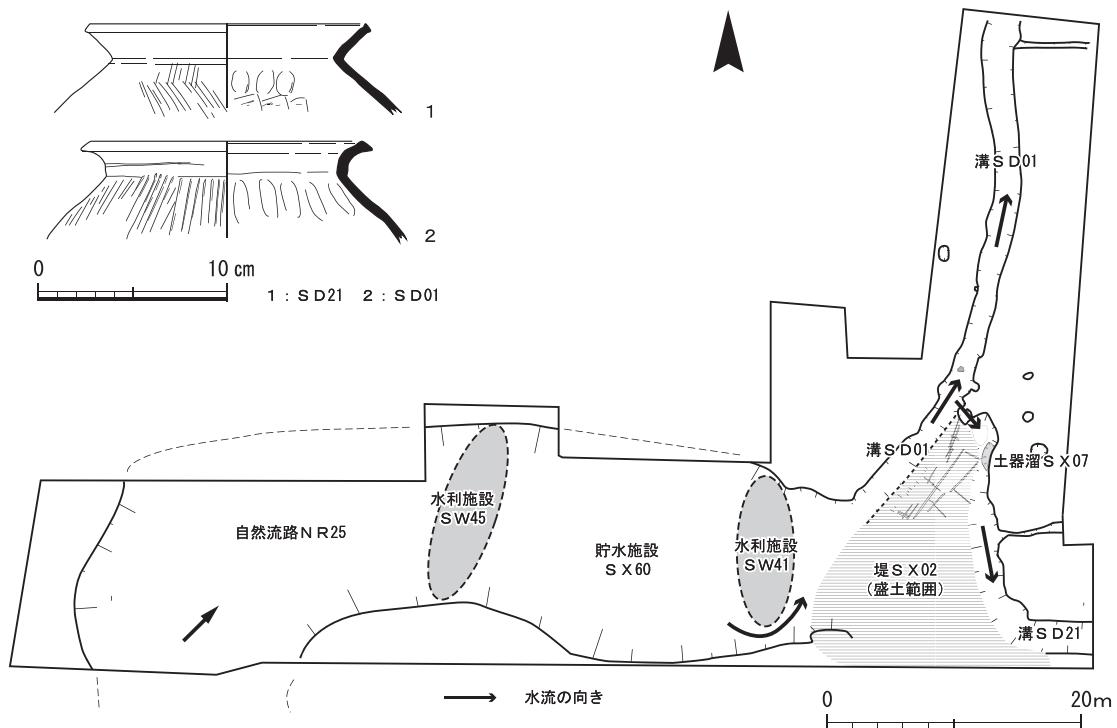
は片合掌状の木組遺構である。木組みの上層では、砂利や粘土で構築された盛土が検出され、本来は堤状であった可能性が高い。木組みには建築部材が転用されており、中には長さ5mを超すような掘立柱建物の柱も含まれる。

これらの遺構が一体で、自然流路N R25の水流の堰き止めおよび貯水を行い、下流のS D01やS D21への配水、水量の調整を行ったと考えられる。なお、これらの遺構に伴って古墳時代前期～中期前半の土師器が出土している。内陸部の遺跡としては珍しく外来系土器

が比較的多く確認されており、注目される。

まとめ 上層で検出した畦畔S X26は現有の里道の位置を踏襲しており、曾我部町一帯の条里地割は奈良時代に起源があることが明らかとなった。また、下層では古墳時代の水利関連遺構を検出した。堤S X02と類似した遺構は愛媛県古照遺跡や大阪府久宝寺遺跡等、西日本各地で検出されているが、貯水施設が一体として検出される事例は極めて稀であり、古墳時代前期の土木技術を知る上で貴重な成果となった。

(桐井理揮)



第2図 下層遺構の平面図(1/600)と出土土器(1/4)



写真 上層遺構検出状況(東から)

## 2. 金生寺遺跡第8次

所在地 亀岡市曾我部町中中小路

調査期間 令和2年5月18日～令和2年10月29日

調査面積 2,430m<sup>2</sup>

はじめに 金生寺遺跡第8次調査は、国営緊急農地再編整備事業に伴い昨年度実施した同遺跡第6次調査(小規模調査)において、溝状遺構を検出し、中世期の遺物が出土したことから小規模調査区を拡張するに至ったものである。昨年度実施した同遺跡第5次調査では、12世紀中頃から13世紀初め頃の掘立柱建物や井戸、区画溝等を検出しており、同じく近辺で調査を進めている犬飼遺跡の調査成果も含めて、周辺地域における中世期の集落様相が明らかになってきている。

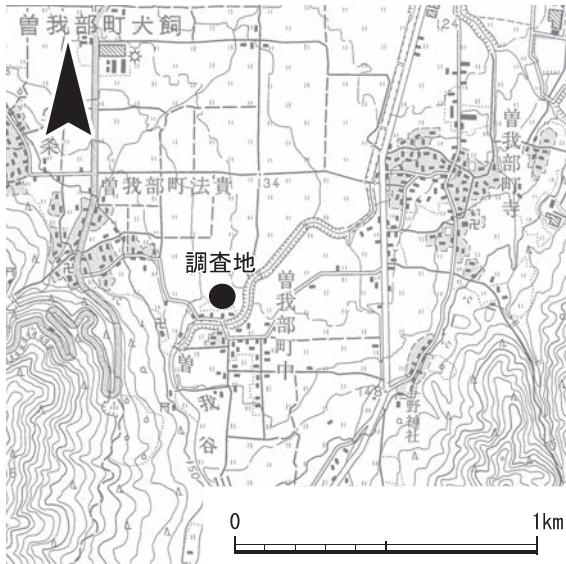
**調査概要** 第6次調査において、小規模調査区を8か所設定し、調査した結果、遺構および顯著な遺物を確認できた5か所について、調査区を拡張して調査を実施した。農道および水路によって、調査区が大きく3つに分かれたため、南側よりG-1、G-2、G-3地区とした。

今回の調査地の南側から東側に回り込むような形で曾我谷川が流れしており、G-1地区の大部分において旧河川の一部と考えられる角礫および丸礫の広がりを検出した。その様相から、かつては現在の曾我谷川のやや西側をその流域としていたことがうかがえる。G-2、G-3地区においても、部分的に礫の広がりを検出した。G-1地区の中央付近において、東西に流れを取る溝状遺構を検出し、その一部に瓦器碗を主体とする遺物の集積箇所を確認した。遺物の様相より、12世紀末から13世紀前半頃のものと考えられる。G-2地区については、中央部から南端にかけては礫層が広範囲に被っており、旧河川の流れ込みによる削平をある程度受けているようであった。G-2地区の中央付近において、南北方向に流れる溝状遺構を検出し、その周辺では、土師器鍋の出土した土坑状遺構、土師器皿が重なり合って出土した土坑状遺構など遺物を含む遺構を少数検出したが、掘立柱建物などの検出には至らなかった。

なお、前述の土坑状遺構2基については、溝状遺構よりも新しく、それぞれの出土遺物も13世紀後半頃のものと考えられる。

今後、これまでの調査分も合わせて、地形的な部分も考慮しながら今回の調査地周辺の土地利用について考えていきたい。

(山本 梓)



### 3. 法貴峰20号墳第2次

所在地 亀岡市曾我部町中中小路、一ノ井出

調査期間 令和2年6月17日～令和2年12月23日

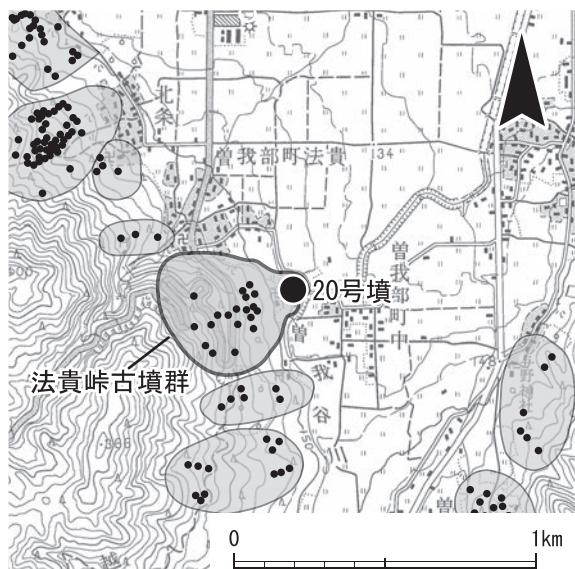
調査面積 1,483m<sup>2</sup>

はじめに 法貴峰古墳群は、亀岡盆地南部の靈仙ヶ岳南西部付近に所在する総数20基からなる群集墳である。曾我部町域を取り囲む丘陵部には多数の古墳群が分布しており、現在、15の古墳群と総数約250基を超える古墳・古墳状隆起が確認されている。

20号墳については、京都府教育委員会による測量・発掘調査が行われており、横穴式石室を持つ径約13mの円墳であることが確認されている。今回の調査は、国営緊急農地再編整備事業に伴い実施した。

調査概要 20号墳は、北東に向かって傾斜する丘陵裾付近の標高約142m付近に位置しており、同古墳群中の他の19基とはやや離れた段丘崖上に立地している。墳丘・石室ともに中世から近現代にかけての著しい削平・改変を受けており、大部分が失われている。

(1) 墳丘 墳形は円墳であり、残存部径約13m、残存高約2mを測る。外表施設としては、南西側墳丘裾にて周溝の可能性のある溝状遺構を部分的に確認した。全周するか否かは明確にし得ない。墳丘上で特筆すべき要素として、2段の列石を確認したことがあげられる。列石はいずれも部分的にしか遺存しておらず、築造当初は全周していたのか、部分的な施工であったのか明確にできない。やや残りの良い上段列石は、石室に沿うように橢円形状に設置されたと判断できる。上段列石については、上部に盛土が残っていたことから、盛土内に埋設されていたと判断できる。下段列石についても位置的には上段と同様の状況と考えられる。これらはいわゆる墳丘内列石で



あり、墳丘盛土との関係から、墳丘・石室の崩落防止のための土留めや、特に上段列石については石室石材の裏込めの機能も担っていたと考えられる。

(2) 埋葬施設 南東方向に開口する両袖式横穴式石室1基を確認した。天井石や西側壁などの大半の石材は失われており、玄室奥壁が5～6段、玄室東側壁が4～5段、同西側壁が1段、羨道東側壁が2段残存する。石室は全長約7.2m、玄室長約3.1m、同幅(残存)約1.9m、同高(残存)約1.9m、羨道長(残存)約4.1m、同幅約0.9m、同高(残存)約1.0mを測る。石室石材には砂岩

の自然石が使用される。玄室床面には角礫と小円礫で構成される敷石が施される。玄室と羨道の境界には樋石が設置され、樋石付近の羨道床面には角礫が数点散乱しており、閉塞石の可能性がある。残存部では顕著な持ち送りは認められず、袖部が段積みであること、礫で閉塞している可能性があること等から畿内型(系)石室の影響を受ける石室と考える。

副葬品として、床面付近より須恵器、鉄製品、玉類、耳環などが出土した。いずれも原位置を留めず、左袖付近にやや須恵器が集中するものの、全体的に玄室内に散乱している印象を受ける。床面に至るまでの埋土には、鉄釘や土師器片が含まれており、中世以降、石室内に侵入あるいは再利用された可能性がある。

須恵器の特徴から、古墳の時期は陶邑編年TK43～209型式期、古墳時代後期後半から末頃と考える。追葬は複数回行われた可能性が高いものの、明確な回数は検討中である。

(3) 中世墓 20号墳の墳丘北側において、12世紀末から13世紀初頭頃の石組遺構を検出した。平面形は南北に長い長方形であり、長軸約1.2m、短軸約0.8mを測る。石組は2段分残存し、床面には敷石が施される。埋土から鉄釘や土師器片、床面付近から鉄釘や完形の土師器皿、瓦器碗が出土した。遺物の出土状況等から中世墓と考える。

まとめ 亀岡盆地の横穴式石室を持つ古墳の様相を検討する上で重要な成果が得られた。特に墳丘盛土の構築状況や盛土内に埋設された墳丘内列石を確認したことにより、古墳構築技術・過程を復元する際の好例になると期待できる。  
(荒木瀬奈)



法貴峰20号墳 全景 (上が北西)

#### 4. 犬飼遺跡第6次

所在地 亀岡市曾我部町法貴綿打川

調査期間 令和2年5月14日～令和3年1月6日

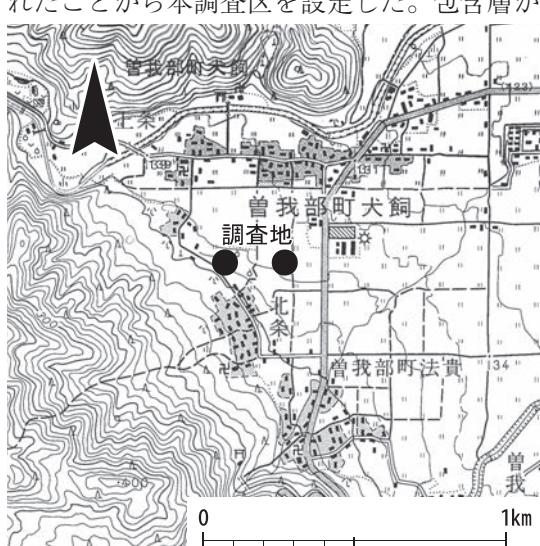
調查面積 2,000m<sup>2</sup>

はじめに 亀岡市の南西部に所在する犬飼遺跡は、古墳時代から中世にかけての集落跡である。遺跡は、低位段丘から扇状地にかけて立地し、付近には古墳群や城跡などが分布する。当遺跡2・3次調査で古墳時代から古代にかけての建物や中世の方形居館などを検出し、4次調査で古墳時代の溝・掘立柱建物・竪穴状構造・土坑などを検出した。今回の調査は、国道423号(法貴バイパス)防災・安全交付金事業に伴い、京都府南丹土木事務所の依頼を受けて実施した。

**調査概要** 今回の調査は、2地点に分かれる。扇状地に立地する東側の調査区では、4次調査で検出した溝の延長部分の確認を目的とした。低位段丘に立地する西側の調査区では、小規模調査としてトレンチを6か所設定し、その結果をふまえて調査範囲を拡張した。

東側の調査区では、今回検出した溝や自然流路と4次調査で検出した溝の延長部とが直交していることが確認できた。4次調査検出溝は、北西—南東方向の直線的な素掘り溝で、古墳時代前期以前に掘削されたことがわかっている。当初、自然流路から取水していたものが、自然流路の埋没とともに機能を失っていったものと考えられる。自然流路の西側で検出した溝状遺構は、埋没した自然流路を再利用した水路と思われる。また、自然流路の東側では中世以降と考えられる杭列を伴う溝も確認した。調査区内では、時期を違えにくつかの水路を確認しており、水利の変遷を考察する上で貴重な事例となる。

西側の調査区では、6か所のトレンチ調査の結果、調査対象地の南東側に遺物包含層が確認されたことから本調査区を設定した。包含層からは奈良・平安時代時代の遺物が多く出土し、包含層の下では溝や土坑・柱穴状の土色変化も確認した。「大穴」と線刻された須恵器片や緑釉陶器の出土があり、一般集落とは異なる性格をもった施設があった可能性が高い。本調査は今後も継続する予定である。



まとめ 今回の調査では、扇状地での自然流路を利用した水利の一端を知ることができた。当地の開発の実態を探るための資料となりうる。山裾に近い緩斜面地には、古代の何らかの施設が設けられていた可能性があり、今後の調査でその性格を明らかにしたい。

(三好博喜)

## いぬかい 5. 犬飼遺跡第7次(H・I地区)

所在地 亀岡市曾我部町犬飼二ノ坪

調査期間 令和2年6月8日～12月23日

調査面積 2,000m<sup>2</sup>

はじめに 犬飼遺跡は、亀岡市の南東部の扇状地上に位置する、古代から中世の集落跡である。これまでの調査では古墳時代前期～古代にかけての流路(C地区)や建物群(D地区)、中世の方形居館(B地区)等幅広い時期の遺構が確認されている。

今回の発掘調査は、法貴谷川河川改修事業に伴って実施した。

**調査概要** 今回の調査では、中世と古墳時代前期の遺構・遺物を確認した。

上層では、中世の屋敷地や道路状遺構を検出した。屋敷地は建物跡2棟と、その周辺にめぐる溝、柵列等で構成される。建物跡1は南北6間以上、東西4間以上の大規模な建物で、おもやと考えられる。建物内部の南東隅には拳～人頭大の礫を敷き詰めた地業の痕跡を確認した。この建物を取り囲むように礫を多量に含む溝を確認した。溝の深さは約30cmと浅く、区画溝、あるいは排水を兼ねた雨落ち溝のような性格を想定できる。埋土中からは瓦器椀や土師器皿がまとまって出土していることから、これらの遺構群は13世紀前半に属するものであろう。それに付属する建物跡2は南北2間、東西3間の小型の付属屋と考えられる。

屋敷地の東側では、道路側溝とみられる2条の溝を確認した。この道路状遺構は、現在の里道をほぼ踏襲しており、当地域周辺の地割の一部は13世紀代まで遡る可能性が高まった。

下層では古墳時代の放棄流路と竪穴建物を検出した。放棄流路は一部が調査区外のためはっきりしないが、幅15m以上に復元できる。堆積状況から、最下層は浅い湿地状を呈していたと考えられ、古墳時代前期の木製品や土器が出土した。中層は古墳時代前期末～中期初頭の堆積で弱いラミナが確認できる。流路内では、護岸と井堰を検出した。

**まとめ** 今回の調査で、遺跡内の広い地域に中世の遺構が広がっていることが明らかとなった。また、下層で検出した井堰は古墳時代前期のものとしては大規模で堅牢な構造であり、遺跡の性格を考える上で重要な調査成果となった。

(松井 忍・桐井理揮)



## いぬかい 6. 犬飼遺跡第8次

所在地 亀岡市曾我部町犬飼灘羅

調査期間 令和2年9月15日～10月29日

調査面積 300m<sup>2</sup>

はじめに 犬飼遺跡は、亀岡盆地南西部の犬飼川によって形成された河岸段丘および法貴谷川によって形成された扇状地に位置する。古墳時代から中世にかけての集落跡である。ここ数年間の調査で、古墳時代から古代にかけての建物跡や中世の方形居館跡などが検出されている。

今回の調査は、国営緊急農地再編整備事業に伴い、農林水産省近畿農政局の依頼を受けて実施した。

**調査概要** 今回の調査では、調査対象地内に、2か所のトレンチを設定した。このうち、明確な遺構を検出したのは、扇状地の上部に設定したトレンチ1か所である。検出したのは、南北方向に延びると考えられる自然流路である。幅10.1m、深さ1.5mを測る。この流路では、上部に堆積した黒色の粘質土層およびシルト層から、多数の土器が出土した。土器は、古式土師器が主体である。口縁端部を内側に折り返して肥厚させる布留式甕や小型丸底壺、高杯などが含まれる。須恵器もわずかに含まれており、古墳時代中期まで存続していたと考えられる。

もう1か所のトレンチでは、遺構は検出しなかったが、河川堆積と考えられる砂礫層から、8世紀から9世紀にかけての土師器片や須恵器片が出土した。

**まとめ** 今回の調査で検出した流路は、調査地の南側に隣接する犬飼遺跡第6次調査で検出された流路の北側延長部と考えられる。遺物の内容も、ほぼ同様である。古墳時代前期から中期にかけての、この地域の状況を示す遺跡と考えられる。

(引原茂治)



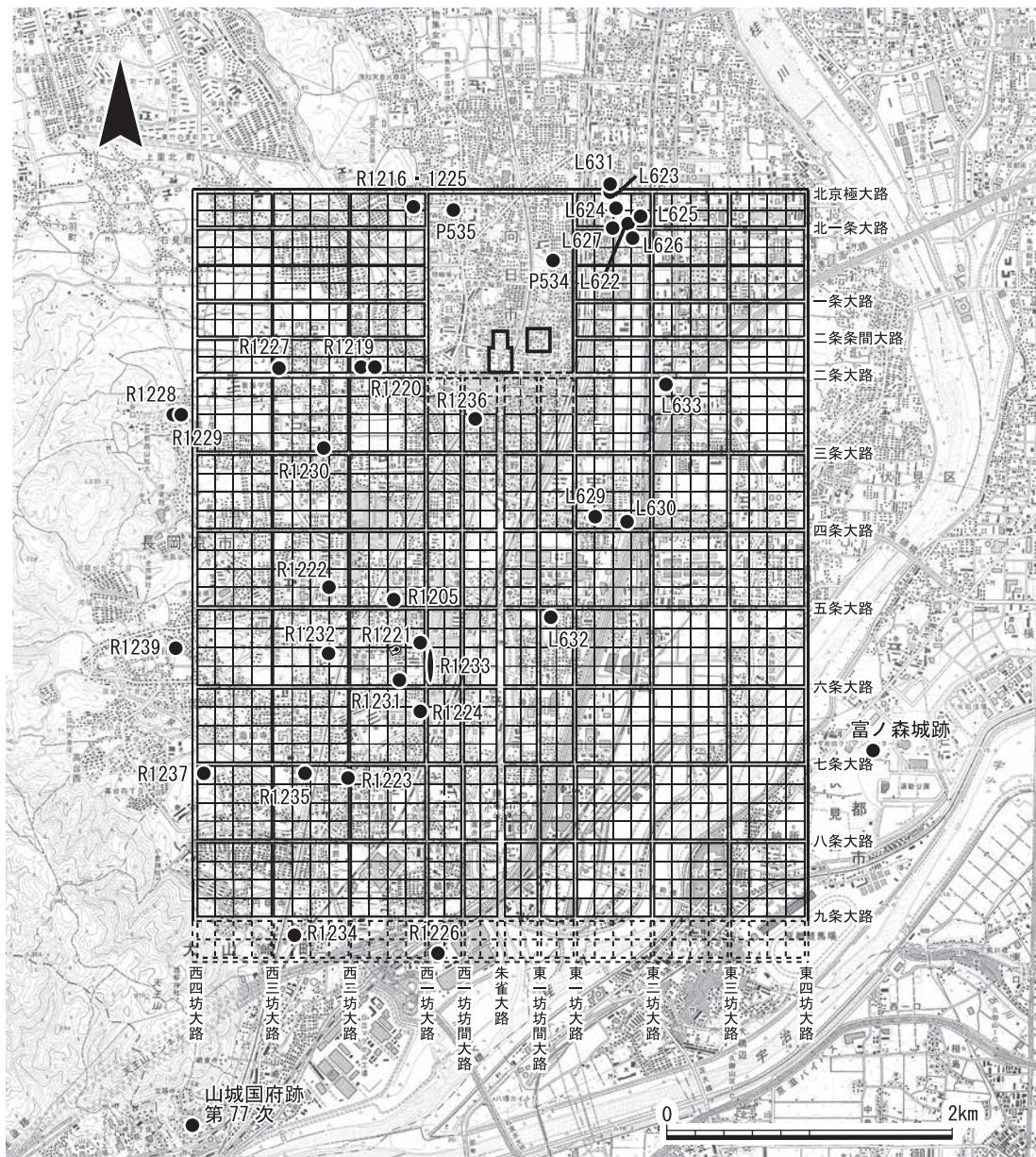
調査地位置図(国土地理院 1/25,000 法貴)



写真 遺物出土状況(南から)

長岡京跡の発掘調査は広域にまたがることから、向日市、長岡京市、大山崎町、京都市及び京都府の発掘調査機関が集まり、発掘調査に関する情報などの共有化のため、月に一度、当調査研究センターにおいて長岡京連絡協議会を行っている。

なお、令和2年4月から9月までの協議会については、新型コロナウイルス感染拡大防止のため、資料提出の報告による情報の共有を図るにとどめ、10月から向日市文化資料館の研修室で十分に感染対策をとった上で再開した。



### 調査地位置図(1/50,000)

(向日市教育委員会・(公財)向日市埋蔵文化財センター作成の長岡京条坊復原図を基に作図)

調査地はPが宮域、Rが右京域、Lが左京域を示し、数字は次数を示す。

ここでは令和2年7月から令和3年1月までに報告があった、宮域2件、左京域11件、右京域21件、その他3件の発掘調査のうち、主なものについて報告する。

**宮域** 宮第534次調査では、長岡京期の土坑を確認したほか、第533次調査で検出した水路跡と一連の遺構と考えられる縄文～弥生時代の流路を確認した。第535次調査では、長岡京期の遺構は確認されなかったが、中世の堀状遺構を検出した。堀状遺構からは15～16世紀の遺物が出土しており、これまで実態が不明であった寺戸城に関連すると考えられる。

**左京域** 左京第622次調査では、長岡京期の北一条大路南北両側溝、東二坊坊間東小路東西両側溝、掘立柱建物、柵列を確認した。北一条大路南側溝からは土師器・須恵器・瓦・土馬等が多量に出土した。左京第625次調査では、長岡京期の掘立柱建物・自然流路を検出した。自然流路からは墨書人面土器のほか木簡などの文字資料が出土しており注目される。左京第626次調査では、東二坊坊間小路東西両側溝や掘立柱建物等のほか多種多様な木製品を含む弥生時代～古墳時代の溝を確認した。左京第627次調査では、北一条大路南北両側溝・掘立柱建物・柵列・区画溝等のほか弥生時代の方形周溝墓を確認した。

左京第630次調査では、長岡京期から平安時代初期の溝や平安時代の土坑・溝・流路・畦畔状遺構・水溜め状遺構などを検出した。平安時代の遺構は、中福知遺跡(平安～鎌倉時代の官衙跡・集落跡)に関するものであろう。

**右京域** 右京第1219次調査では長岡京期の二条大路北側溝を確認した。右京第1220次調査では、長岡京期の二条大路北側溝、西二坊坊間西小路東側溝、土坑、溝などを検出し、西二坊坊間西小路東側溝から銅製の鈴が1点出土した。右京第1221次調査では、長岡京期の西一坊大路東側溝を確認した。右京第1222次調査・開田城ノ内遺跡では、長岡京期の東三坊坊間小路西側溝、五条三坊五町宅地内南北溝、掘立柱建物のほか奈良時代の掘立柱建物・土坑、飛鳥時代の総柱建物・カマド付竪穴建物、縄文時代晩期の流路跡などを検出し、多くの成果を得た。右京第1231次調査では、長岡京期の溝・掘立柱建物のほか縄文時代の流路堆積を確認し、流路堆積から縄文土器や石器・剥片が出土した。

右京第1216・1225次調査は、宝菩提院廃寺の西端部に当たる。第1216次調査では白鳳期の瓦窯に伴う灰原、ピットおよび長岡京期～平安時代前期の整地層、室町時代の落ち込みを確認した。灰原からは軒瓦のほか鳴尾・鬼瓦・道具瓦など多種多量の瓦が出土し、宝菩提院廃寺瓦窯の生産状況を復原する手がかりが得られた。また、整地層からは綠釉陶器や灰釉陶器、墨書土器を含む多量の土器が出土し、9世紀前半に境内地の改変が行われたことが明らかになった。第1225次調査では一連の灰原と整地層のほか瓦敷を確認し、灰原として利用していた窪地を埋め立てて瓦で舗装し、境内地を拡充したことが推測された。

**その他** 大山崎町山城国府跡第77次調査では、平安時代(10世紀後半頃)の大規模造成を確認し、多量の綠釉陶器が出土した。京都市富ノ森城跡の調査では、鎌倉時代後半から安土桃山時代の柱穴・土坑・井戸・墓・溝などを確認し、井戸からは鎌倉時代後半の乙訓型土師器皿がまとまって出土した。

(松尾史子)

# 普及啓発事業(令和2年8月～令和3年1月)

当調査研究センターでは、文化財活用の一環として埋蔵文化財の発掘調査成果や最新の研究成果を分かりやすく紹介し、府民の方々に文化財に対する理解をいっそう深めていただくため、埋蔵文化財セミナーや発掘調査速報展をはじめ、「関西考古学の日」関連事業、向日市まつりへの参加などの普及啓発活動を行っている。

令和2年8月～令和3年1月にかけては、新型コロナウイルスへの感染拡大防止のため、十分に感染予防対策をとった上で事業を実施した。なお、「関西考古学の日」関連事業や向日市まつりへの参加は、今年度については事業自体が中止となり実施していない。

当該期間中に実施した普及啓発事業には、夏休み考古学体験講座「勾玉をつくろう！」、第144回埋蔵文化財セミナーのほか、京都府立図書館での出張展示、京田辺市立田辺東小学校への出前授業、当調査研究センターの設立40周年を記念して実施した特別展覧会「動乱の世から太平の世へ－かわりゆく人々のくらし－」及び特別講演会などがある。

## 夏休み考古学体験講座「勾玉をつくろう！」

令和2年8月8日(土)から10日(月)までの3日間、当調査研究センターにおいて、乙訓地域の小学5・6年生を対象に実施した(各日2講座。計6講座。)新型コロナウイルス感染拡大防止のため1講座の募集人数を10名と例年よりも規模を縮小した。6講座合わせて57名の参加があった。

## 京都府立図書館出張展示

令和2年8月28日(金)から9月13日(日)にかけて、京都府立図書館2階ナレッジルームにおいて、「府庁周辺の桃山文化」と題して出張展示を行った。京都府庁周辺の発掘調査で出土した金箔瓦や桃山茶陶を展示し、調査成果をパネルで紹介した。337名の見学者があった。

## 第144回埋蔵文化財セミナー

令和2年9月26日(土)に亀岡市ガレリアかめおかにおいて実施した。『中世の騒乱と武士の館』をテーマとし、当調査研究センター桐井調査員から亀岡市曾我部町犬飼遺跡で見つかった中世居館の調査成果について報告した後、亀岡市文化資料館飛鳥井拓学芸員から「文献史料からみ



京都府立図書館出張展示の状況



第144回埋蔵文化財セミナー会場風景  
(於：ガレリアかめおか)



特別講演会：講演会の様子  
(於：京都産業会館ホール)



特別展覧会：戦国時代の堀を復元したタペストリー  
(於：京都文化博物館)

た丹波の中世城館と領主」について、京都府教育委員会中居和志副主査から「中世・丹波地域の城館の様相」について報告いただいた。今回は申込制とし、参加者は110名であった。

#### 京田辺市立田辺東小学校「勾玉づくり」出前授業

令和3年1月13日(水)に6年生34名を対象に勾玉づくりの出前授業を実施した。コロナ禍の影響により多くの行事が中止となる中、卒業記念の一つとしたいという先生方の思いから依頼があった。児童たちは懸命に石を削り、思い思いの勾玉を制作していた。

#### 特別講演会「動乱の世から太平の世へーかわりゆく人々のくらしー」

令和2年12月6日(日)に、後述の特別展覧会に先立ち京都産業会館ホールにおいて実施した。展覧会と同じテーマのもと、藤井讓治京都大学名誉教授から「かわりゆく京都 秀吉の御土居と家康の二条城」と題して、山田邦和同志社女子大学教授から「戦国・桃山時代と京都のすがた」と題してご講演いただき、当調査研究センター加藤雄太調査員が「遺物からみる戦国・江戸のくらし」について報告した。申込制ではあったが、多数応募があり、参加者は105名であった。

#### 特別展覧会「動乱の世から太平の世へーかわりゆく人々のくらしー」

令和2年12月12日(土)から令和3年1月31日(日)まで京都文化博物館で開催した。展覧会の実施に当たっては、展示の内容を充実するために、京都府庁新行政棟建設予定地で見つかった戦国時代の堀を実物大に復原したタペストリーを作成した。加えて、考古イラストレーター早川和子氏に①「16世紀前半頃の都の様子」と②「戦国時代の館を囲む堀と周辺の景色」の2点を作画していただいた(巻頭図版)。②はタペストリーと同じく京都府庁新行政棟建設予定地で見つかった戦国時代の堀を東側から描いたもので、背景は堀の埋土の花粉分析に基づいて秋の稻刈りと白い花が咲く蕎麦畑の風景とした。①は堀の時期に近い16世紀前半の都を北西上空から描いたものである。作画に当たっては、京都大学名誉教授高橋康夫氏のご助言を得た。

展覧会の見学者は、新型コロナウイルスの影響の中、3,313名であった。考古資料の地味なイメージが変わったという声や、戦国時代から江戸時代になって物量・質ともに豊かになり人々の暮らしが変わったことを感じたという感想があり、展示を楽しんでいただけたことを実感した。ご協力いただいた各機関に、記して感謝いたします。

(松尾史子)

## センターの動向

(令和2年8月～令和3年1月)

- 8 3 菱田理事新名神小樋尻遺跡(城陽市)現地指導  
8 夏休み考古学体験講座「勾玉をつくろう！」(於：センター、参加者57名、～10日)  
26 長岡京連絡協議会(書面にて報告)  
　　文化庁主催第1回埋蔵文化財担当職員等講習会(リモート開催、調査課職員5名参加)  
28 京都府立図書館出張展示(見学者337名、～9月13日)  
9 8 文化庁主催文化財マネジメント職員養成研修(筒井係長)  
10 増田理事新名神小樋尻遺跡(城陽市)現地指導  
18 上野遺跡(令和2年度調査)出土遺物展示(於:京丹後市立古代の里資料館、見学者581名、～22日)  
23 長岡京連絡協議会(書面にて報告)  
26 第144回埋蔵文化財セミナー「中世の騒乱と武士の館」(於：ガレリアかめおか、参加者110名)  
28 平ヶ岡古墳群(京丹後市)調査開始  
10 1 平遺跡(京丹後市)調査開始  
6 増田理事国営亀岡金生寺遺跡(亀岡市)現地指導  
12 国営亀岡金生寺遺跡記者発表  
14 第一学院高等学校出前授業(於：京都市、参加者14名)  
28 長岡京連絡協議会(於：向日市文化資料館)  
29 全国埋蔵文化財法人連絡協議会研修会(於：愛媛県、調査課職員1名参加、～30日)  
　　平遺跡(京丹後市)、国営亀岡金生寺遺跡・犬飼遺跡(亀岡市)調査終了  
30 満願寺跡遺跡検討会(上原理事、吉岡博之氏：舞鶴市郷土資料館、河森一浩：宮津市教育委員会出席)  
11 4 カンジョガキ遺跡ほか(京丹後市)調査開始  
9 石野理事国道24号・新名神小樋尻遺跡(城陽市)指導(リモート対応)  
10 菱田理事・高橋理事国道24号・新名神小樋尻遺跡現地指導  
12 小樋尻遺跡記者発表  
14 満願寺跡(令和2年度調査)出土遺物展示記者発表  
15 満願寺跡出土遺物展示(於:舞鶴市郷土資料館、参加者245名、～23日)  
24 稲泉遺跡(福知山市)調査開始  
25 長岡京連絡協議会(於：向日市文化資料館)、国営亀岡法貴峰20号墳(亀岡市)現地公開記者発表  
26 日向理事国道24号・新名神小樋尻遺跡現地指導・稚児野遺跡(福知山市)出土遺物展示記者発表  
28 国営亀岡法貴峰20号墳現地公開(参加者83名)  
　　稚児野遺跡出土遺物展示(福知山市夜久野化石郷土資料館、参加者156名、28日・29日、12月5日・6日)  
12 6 特別講演会「動乱の世から太平の世へ」(於：京都産業会館ホール、参加者105名)  
11 大岩原・堂後遺跡(京丹後市)調査開始  
　　長岡京跡・開田遺跡(長岡京市)調査開始  
12 特別展覧会「動乱の世から太平の世へ」開始(於：京都文化博物館、観覧者3,313名、～令和3年1月31日)  
18 第36回理事会(於：ルビノ京都堀川)  
21 柚ノ木遺跡(井手町)調査開始  
23 犬飼遺跡(河川改修・亀岡市)調査終了  
1 4 国営亀岡法貴峰20号墳(亀岡市)調査終了  
6 犬飼遺跡(国道423号・亀岡市)調査終了  
13 京田辺市立田辺東小学校「勾玉づくり」出前授業(参加者34名)  
23 山城郷土資料館文化財講座「舞鶴市満願寺跡の発掘調査からみる中世寺院の実態」(講師：竹村主任)  
27 長岡京連絡協議会(於：向日市文化資料館)  
29 平安京跡遺跡検討会(日向理事、馬瀬智光氏：京都市文化財保護課出席)

## 編集後記

新型コロナウイルスの第3波もようやく収束の兆しが見え、桜の便りが聞かれる季節になりました。ここに、『京都府埋蔵文化財情報』第139号が完成しましたので、お届けします。

本号では、分析結果報告1件、今年度の調査成果6件、共同研究報告1本のほか、職員の日ごろの研究成果を紹介する研究ノート3本を掲載しました。ご味読いただければ幸いです。

なお、今年度は当調査研究センター設立40周年記念事業として特別展覧会や特別講演会などを実施し、コロナ禍ではありましたが多くの方に見学、参加していただきました。記して感謝します。

(編集担当 松尾史子)

## 京都府埋蔵文化財情報 第139号

令和3年3月22日

発行 公益財団法人  
京都府埋蔵文化財調査研究センター  
〒617-0002 向日市寺戸町南垣内40番の3  
Phone (075)933-3877(代) Fax (075)922-1189  
<http://www.kyotofu-maibun.or.jp>



印刷 中西印刷株式会社  
〒602-8048 京都市上京区下立売小川東入ル  
Phone (075)441-3155 Fax (075)417-2050



KYOTO  
ARCHAEOLOGY CENTER